3. 学寮機能の整理および新寮の機能設計・運営

(1) 本学の学生寮の特徴

日本の大学の学生寮は、かつて主流だった「相部屋型」から「個室型」へと変化し、さらに近年では、「ルームシェア型」の学生寮も見られ、その機能は多様化している。このような学生寮の変化・多様化は、時代背景に伴い、学生寮に求められるものが変化しており、今日では経済的支援にあわせて、教育的支援も求められてきていることを反映している。こうしたニーズを踏まえ、お茶の水女子大学でも、新たな学生寮を建設し、既存寮との機能分化を行った。

お茶の水女子大学には、主として大学院生を対象とした小石川寮（定員 80 名、自治寮）と、学部生及び留学生を対象とした国際学生宿舎（定員 400 名、自治寮）という二つの既存寮がある。そして新たに平成 23 年度より、学部 1、2 年生を対象とした新寮「お茶大 SCC(Students Community Commons)」（定員 50 名）が開寮した。

これら三つの学生寮は、対象とする学年や寮の規模、立地等の違いの他、小石川寮、国際学生宿舎は個室型寮である一方、お茶大 SCC は、五人で一つの「ハウス」を形成し、ハウスでの共生・協働をするルームシェア型寮であり、コンセプトも異なっている（三つの寮の詳細については、赤坂(2010),鈴木・元岡・桂(2012)を参照。）。

小石川寮は、お茶大 SCC に隣接した学生寮で、大学院生が入寮している。また、寮は寮生の自治会により運営されている。各部屋は個室であり、補食室、風呂等は共有で利用し、エントランス、メールボックス、多目的ラウンジはお茶大 SCC と共同で利用する。小石川寮は、「研究」と「共同」、そして「社会性」を育む場であることを目指しており、共同生活を営みながら研究を進めると同時に、協調性、社会性を身につけることを目指している（図 1 参照）。

図 1：小石川寮の様子

国際学生宿舎は、日本人学生と留学生が入寮している。寮は寮生の自治会により運営されており、お茶の水女子大学以外の国立大学の留学生も入寮対象者となっていて、約 400 名が入居している（女性のみ）。国際学生宿舎は、日本人学生と留学生が共に生活する中で、国際交流を推進し、国際性を身につけることを目指している（図 2 参照）。

図 2：国際学生宿舎の様子

最後に、お茶大 SCC の概要を述べる。お茶大 SCC は、二つの既存寮と異なり、自治寮ではなく、大学が運営管理を行っている。また、「ハウス」制を採用しており、五人で一つの「ハウス」を形成する。これは、欧米などでは一般的に見られる学生寮の居住形態で、複数人で一つのコミュニティ（ハウス）を形成し、ハウス内やハウス間での協働やコミュニケーション活動を通じて、共に成長し合うことを目指している（図 3 参照）。

図 3：お茶大 SCC の様子

(2) 新寮の機能設計・運営

1) お茶大 SCC の初期構想・理念・概要

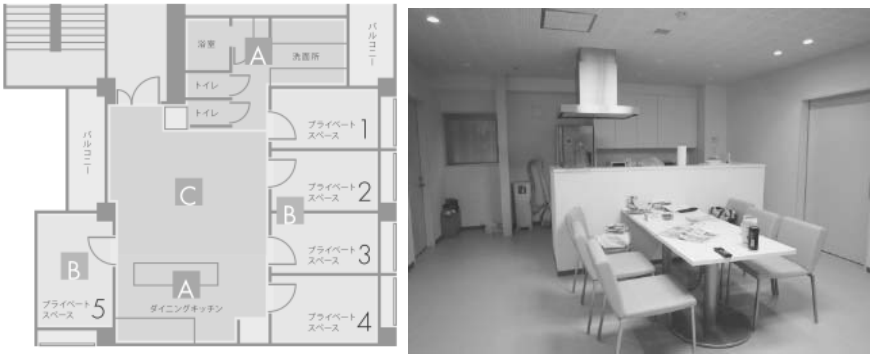
お茶大 SCC は、学内ワーキンググループにより、2 年間に渡る検討・概念設計を経て、平成 23 年度より開寮した。この学内ワーキンググループには、プロジェクト責任者の学生支援センター長を始め、学内の教職員、学寮アドバイザーも参加し、コンセプトから議論を重ねた。また、同時期に、アメリカの学生寮の視察調査を行い、学生寮が単なる住居ではなく、教育的機能をあわせもった場として活用されている様子を見て、そこで行われていたアイディアをお茶大 SCC にも取り入れた。そして、お茶大 SCC の理念として、人間形成機能を担う教育寮としていくこととし、ここから、「共に住まい共に成長する学生寮」をコンセプトとした。これは、他者との共生を通じて、自立と協調に必要な精神とコミュニケーション能力を培うことを目指すものである。

また、このコンセプトに基づいて設計を行い、物理的な空間を形作った。具体的には、五人で一つのコミュニティ「ハウス」を構成し、各ハウスには共有キッチン、トイレ(二つ)、洗面所、浴室が設置され、これらの共有スペースの周囲に、鍵のかかるプライベートスペースを配置することとした。プライベートスペースには、ベッド、机、クローゼット、棚、エアコン等があり、インターネットにも接続できるが、あえて最低限のスペースに作られており、できるだけ共有スペースに出て過ごすように促すように設計した。

このような物理的特徴の他にも、学生支援プログラム、学寮ガイドブック、学寮アドバイザーの配置など、様々な教育的支援を提供している。

学生支援プログラムは、他者との交流やコミュニケーションを通して、豊かな人間関係をはぐくみ、共に学び合うことをコンセプトとするもので、具体的には、①寮生同士の交流を促進させるための「交流プログラム」、②寮生自身が主体的に企画・活動し、共に学び合うための「自主企画」、③大学とは異なる寮独自の学びの場である「学修プログラム」の三つを柱としている。そして、これらの様々な活動・交流を通して、他者と助け合いながら、主体性・自立性をもった人格を養うことを目指した支援を行っている。

また、学寮ガイドブックは、約 90 ページで、内容は、寮生活全般に関することを説明している。一例として、寮での暮らし方、学生支援プログラムの実施方法、地域との関わりについてなどが記載されている。このガイドブックは、全寮生に入寮時に配布し、4 月の新寮生オリエンテーションで学寮アドバイザーが説明を行い、寮生活を円滑に送ることができるように促すことを目指している。学寮アドバイザーについては、次節で後述する。

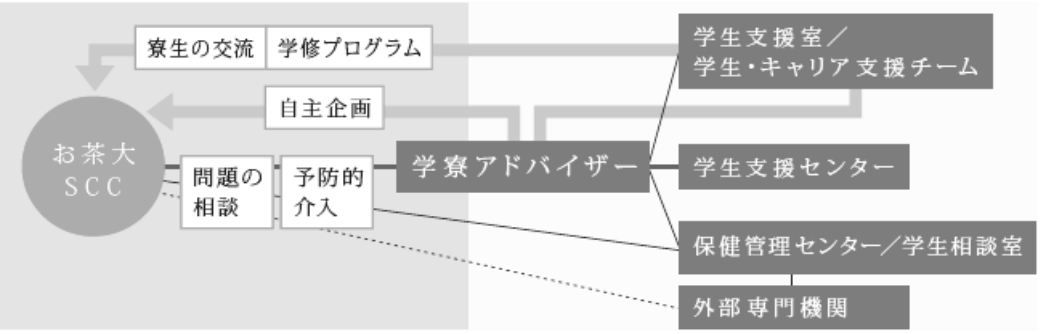


ハウスの概要

学寮ガイドブック

大学の管理運営組織としては、以下に示したように、学寮アドバイザーが寮生との窓口となり、学内外の関連機関と連携して、対応にあたる仕組みを作っている。

学寮アドバイザーは、本学の教員で、寮生の相談窓口やサポート、大学と寮生のパイプの役割をしており、寮生の身近な教員として、寮生の相談に乗ったり、寮生協議会の会議に参加して助言をするなどのサポートを行っている。また、学外の専門機関であり、寮生同士の交流を活性化させる「SCC サポーター」や、本学の学生支援を担当する学生・キャリア支援チーム等と連携して、対応を行っている。



大学の管理運営組織（平成 23 年度）

2）学生支援プログラム

【平成 23 年度】

以下に、平成 23 年度の学生支援プログラムの一覧を示した。次に、これらの活動状況を時系列順に報告する。

平成 23 年度お茶大 SCC 年間行事一覧

日時	行事
4 月 10 日	新寮オリエンテーション、ハウス長オリエンテーション
4 月 10 日	ウェルカムパーティー
4 月 16 日	開寮式、第 1 回学修プログラム
4 月 22 日	チームワーク作りのためのワークショップ
5 月	ハウスの表札作り
6 月　4 日	第 1 回学修プログラム発表会
6 月 18 日	第 2 回学修プログラム
7 月 16 日	第 2 回学修プログラム発表会
9 月 23 日	コミュニケーションを円滑にするワークショップ
10 月 23 日	第 1 回お茶大 SCC 寮祭
11 月 19 日	第 3 回学修プログラム
12 月 17 日	第 3 回学修プログラム発表会
3 月 20 日	第 4 回学修プログラム（寮生による自主企画）
3 月 20 日	1 年の振り返りと来年度に向けたワークショップ
3 月 21 日	卒寮証書授与式

新寮オリエンテーション、ハウス長オリエンテーション（4 月 10 日）

新寮オリエンテーションは、寮での暮らし方を理解することを目的として、全新寮生を対象に、共有リビングを使用して行った。このオリエンテーションでは、寮に関わる教職員の紹介、寮生活全般の規則（掃除について、ゴミの分別や出し方について、居室・ハウスリビングの使い方について等）、ハウスでの過ごし方やハウスのルール、問題が発生した際の相談体制（相談窓口・相談機関の説明）等、寮生ガイドブックを用いて説明し、新寮生が寮生活に早く馴染めるよう、アドバイスを行った。

新寮オリエンテーションの後半では、引き続き共有リビングを使用して、ハウス長を対象としたハウス長オリエンテーションを行った。このオリエンテーションでは、ハウス長の役割について説明し、ハウス長が連携して担当する寮生協議会の委員を決め、それぞれの委員の活動内容を説明し、活動を進めていくよう指導を行った。

新寮オリエンテーション、ハウス長オリエンテーションの様子

ウェルカムパーティー（4 月 10 日）

ウェルカムパーティーは、1 年生を寮に迎え、寮生同士の親睦を深めることを目的としたイベントで、2 年生全員で主催する自主企画である。本年度は、2 年生がリビングの飾りつけ、イベントの準備等を行い、当日は、寮生全員の自己紹介、ハウス・寮全体での歓談、ビンゴ大会などが行われた。

ウェルカムパーティーの様子

開寮式、第 1 回学修プログラム（4 月 16 日）

開寮式は、学内外の来賓、SCC 寮生、小石川寮生等を招いて、共有リビングで行われた。開寮式では、各来賓の挨拶、SCC 寮生協議会長の挨拶、SCC の概要、学生支援プログラムの説明などを行い、その後、来賓は各ハウスに分かれて、ハウスメンバーとの歓談を行った。

開寮式後は、引き続き共有リビングで、第 1 回学修プログラムを行った。学修プログラムは、年に 4 回実施し、お茶大の教員がお茶大 SCC に出向いて講演を行う。その後、講演内容に関するテーマについてハウスごとに学びを深め、ハウスで学修したことを寮生同士で発表する発表会を行う。このプログラムを通じて、自分たちで興味・関心をもって学ぶ楽しみや、ハウスメンバーと交流しながら学ぶ意義を体験することを目指している。

第 1 回学修プログラムは、羽入学長が「オープニングレクチャー」という表題で講演を行い、その講演について、6 月 4 日（土）に五つのハウスが発表を行った。

チームワーク作りのためのワークショップ（4 月 22 日）

チームワーク作りのためのワークショップは、外部の講師を招き、共有リビングを使用して行われた。このワークショップでは、ハウスメンバーや他のハウスの寮生と円滑なコミュニケーションをもつための方法や共同生活で気を付けることなどを、外部の専門講師に指導を受けて学んだ。ワークショップでは、ジェスチャーによる伝言ゲームや、ペアになって、与えられたテーマについて即興で話を創作していくお話作りゲームなど、様々なゲームを行い、それらを通じて、自分から積極的に他者と関わることや、自他の類似性、異質性を理解し、受け入れていくことを目指した。活動後の意見交換の場では、体を動かして自分から相手に関わっていくような様々な活動を通じて、他者との交流がより楽しく、積極的に行えるようになったという感想が多く挙がった。

ワークショップの様子

ハウスの表札作り

4 月中旬から 5 月上旬にかけて、ハウスメンバー全員で、自分たちのハウスに名前をつけ、ハウスの表札を作る活動を行った。ハウス名を決めるため、ハウスメンバーで意見を出し合ったり、材料を使って表札を作り上げたりしていく過程を通じて、メンバーとの交流が促進し、全員で協力して一つのものを作り上げることで、楽しみながら仲間意識をより強くもつことを目指した。

各ハウスの表札

第 1 回学修プログラム発表会（6 月 4 日）

第 1 回学修プログラム発表会では、全寮生と教職員が参加して、五つのハウスが、各ハウスで行った学修成果を発表した。発表担当のハウスは、講演テーマに関連のある学修をハウスで進め、スライドを作成し、発表を行った。発表では、歴史的観点から女性リーダーを考える発表や、様々な分野のリーダーを調べ、自分たちが考えるリーダー像をまとめる発表などが挙げられた。発表後には質疑応答を行い、参加者同士で学修をより深めることができた。

第 1 回学修プログラム発表会の様子

第 2 回学修プログラム（6 月 18 日）、第 2 回学修プログラム発表会（7 月 16 日）

第 2 回学修プログラムは、耳塚教育機構長が「大学生活で何を身につけるか」という表題で講演を行い、その講演について、7 月 16 日（土）に五つのハウスが発表を行った。発表では、自分たちが SCC や大学生活で身につけたいことをまとめた発表や、講義内容についてハウスで話し合い、気がついたことなどが挙げられた。

第 2 回学修プログラムの様子

コミュニケーションを円滑にするワークショップ（9 月 23 日）

コミュニケーションを円滑にするワークショップは、外部の講師を招き、共有リビングを使用して行われた。このワークショップでは、①寮祭に向けて、どのように取り組んでいけばいいかをみんなで考えること、②ワークショップで得た気づきをハウスでの活動に活かして、普段の寮生活をより円滑なものにすることを目標とした。

はじめに、学寮アドバイザーより、今回のワークショップの導入説明をした。その後、講師の指導により、グループ分けをし、グループごとにいくつかの活動を行い、メンバーのよかったところや、これらの活動から気づいたことを寮祭にも活かしていくことなどを話し合った。その後、参加者全員で、寮祭についての話し合いを行い、出された意見や感想をハウスに持ち帰って検討し、寮祭の企画・準備を進めることとした。

第 1 回お茶大 SCC 寮祭（10 月 23 日）

お茶大 SCC 寮祭は、10 月 23 日（日）10：00～14：30（10 月 22 日は準備日）に、お茶大 SCC 共有ラウンジおよび各ハウスを使用して行った。来客数は、29 名（お茶大教職員（11 名）、寮生保護者（13 名）、近隣の住民（2 名）、お茶大の友人等（3 名））であった。

寮祭当日は、ラウンジでの催し物と並行して、各ハウスに来客を招待する時間を設けた。ラウンジでは、10 のハウスがハウスごとに催し物を行った。催し物は、パネルによる展示発表（7 ハウス）、パワーポイントによるスライドの発表（2 ハウス）、模擬店（1 ハウス）であり、各ハウスから 1～2 名の説明員がラウンジに常駐して、来客への説明や物品販売等を行った。また、お茶大 SCC が平成 23 年度グッドデザイン賞を受賞した掲示物、お茶大グッズ販売スペース、休憩スペース等を設けた。

ハウスへの来客招待はハウスのラウンジに来客を招いて行われ、季節のデザートを出したり、たこ焼きパーティーをしたりするなど、ハウスごとに趣向を凝らして来客をもてなした。

来客からの感想として、「いつも電話で話は聞いているが、実際にみんなで楽しそうに暮らしている様子が見られて、とても安心した（寮生保護者）」「展示などを見て、寮の暮らしや様子がよく分かり、よかった（近隣の住民）」「普段はハウス内での交流はあるが、ハウス間ではあまり交流していなかった。でも、寮祭を通じて、ハウス間での交流の機会がもてたし、別のハウスの様子を知ることができたりして、寮での活動や人間関係が広がったと思う（寮生）」などの感想や意見が挙げられた。

ラウンジでの催し物の様子

第 3 回学修プログラム（11 月 19 日）、第 3 回学修プログラム発表会（12 月 17 日）

第 3 回学修プログラムは、元岡先生が「キャンパスに見るお茶の水女子大学の歴史」という表題で講演を行い、その講演について、12 月 17 日（土）に五つのハウスが発表を行う。

第 3 回学修プログラムの様子

第 4 回学修プログラム（3 月 20 日）（寮生による自主企画）

第 4 回学修プログラムは、寮生による自主企画で「内定者報告会」を行った。これは、今年度内定したお茶大 OG4 名を SCC に招き、それぞれの「大学生活の様子」「就職活動の流れ」「業界の選び方」などを聞き、後半はフリーディスカッションで、質問や意見交換を行った。

第 4 回学修プログラムの様子

修了証書授与式（3 月 21 日）

修了証書授与式は、卒寮する 2 年生がこれまでの寮での生活や活動を振り返り、その経験について大学が与えた機会を活用して成長してきたことを確認し、修了証書を受け取ることを目的としている。参列者として、学長、教育機構長・理事・副学長、お茶大 SCC 寮生 1、2 年生が参列し、はじめに学長より、お祝いの言葉をいただいた後、寮生協議会長がお礼の言葉を述べ、2 年生全員に修了証書が授与された。また、2 年生による文集「寮生活で学べたこと」を作成、配布した。修了証書授与式後は、1 年生から 2 年生に送るさよならパーティーを実施した。

修了証書授与式の様子

また、この他のハウスでの活動として、ハウス会議、ハウス長会議、調理教室を定期的に実施している。

ハウス会議は、ハウスメンバー全員が参加して、ハウスごとに週に 1 回行っている。この会議では、翌週のハウスの予定や当番の分担等を決めたり、ハウスで行う企画や活動について話し合ったり、寮生活に関する意見・要望などを出し、ハウス会議録というファイルに記録している。

ハウス長会議は、ハウス長が参加して、月に 1 回程度、ラウンジで行っている。この会議では、ハウス長から議題を収集して、その時々のハウスの抱える問題や要望について話し合ったり、SCC 全体の問題や改善点などの意見を出し合ったりして、ハウス長会議録というファイルに記録している。

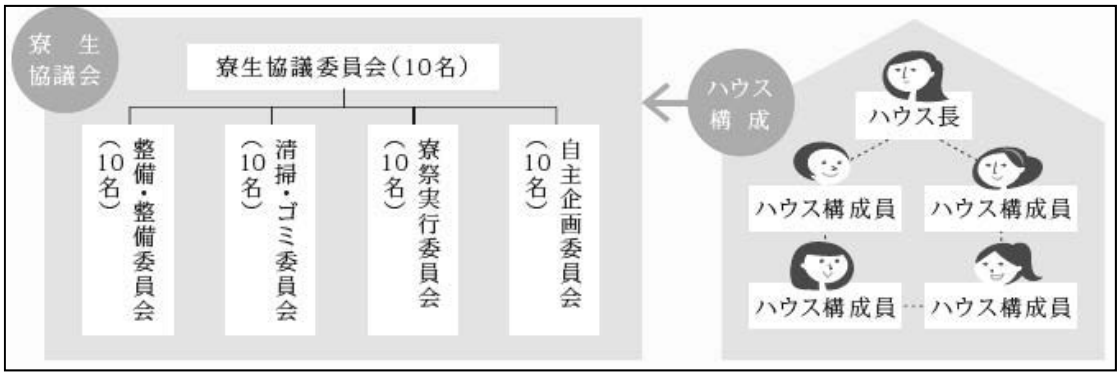
調理教室は、ハウスごとに毎月 1 回行い、事前にハウスで、調理教室の日時やメニューを決めておく。そして、当日までに必要な食材等を揃え、当日は、ハウスメンバー全員で役割を決めて調理を分担して行い、「Cooking レシピ」という記録用紙にメニューやレシピ、調理のコツや気づいたこと、意見・感想などを記入して、ファイルを作成する。

【平成 24 年度】

平成 24 年度の活動のうち、平成 23 年度から変更があったものを抜粋して示す。初年度の取り組みを見直し、寮生組織の変更、学修プログラムの形式の変更、清掃指導のワークショップを行った。

寮生組織の変更

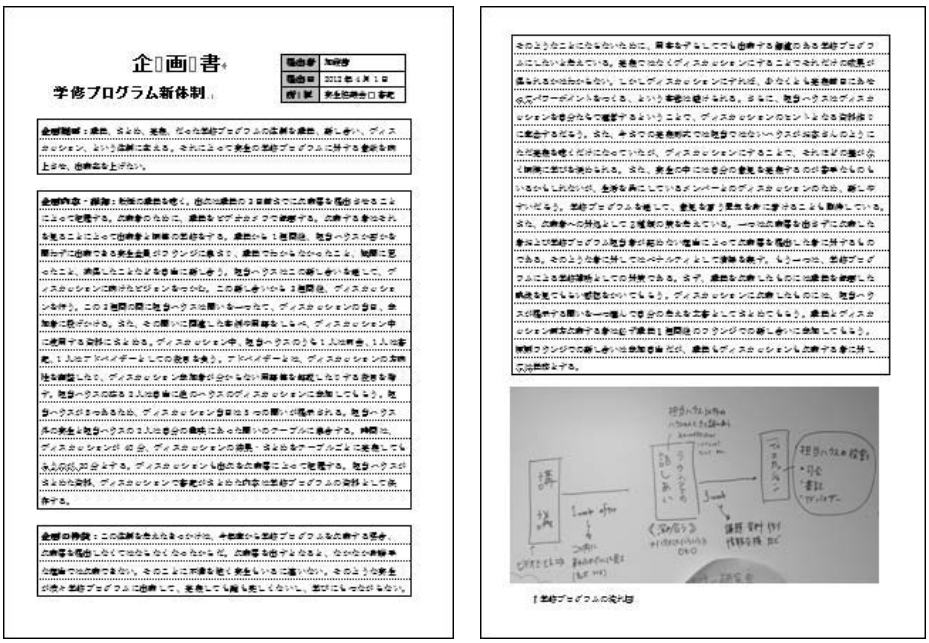
昨年度は、寮生組織である「寮生協議会」を 10 名のハウス長で編成していたが、ハウス長の負担が大きいこと、協議事項がハウスメンバー全体に行きわたらず、動きにくいなどの問題が寮生から挙げられた。そこで、今年度は、寮生との話し合いの結果、全員の寮生が寮生協議会に所属して、何らかの役割を担い、ハウスの中に各委員が一人ずついることとした。それにより、ハウス内での情報共有がしやすくなり、委員会ごとに月に 1 回定例会を開き、問題点や解決策を検討するなど、活動が活性化した。



寮生組織の図（平成 24 年度）

学修プログラムの形式の変更

昨年度は、講師による講演を行い、その後ハウスで学修を深め、1 ヶ月後にハウスごとに学修成果を発表する形式で実施した。その結果、出席率が低く（各回 30～40%）、出席者が固定化してしまい、学修が深まらないハウスもあるといった問題が寮生から挙げられた。そこで、寮生による話し合いの結果、①講師による講義、②担当ハウスでの話し合い、③全体でのディスカッション、という体制に変え、それによって寮生の学修プログラムに対する意欲を向上させ、出席率を上げたいという提案があり、今年度は 1，2 回目の学修プログラムを寮生の提案した形式に修正した。また、欠席の場合は欠席理由を書いた欠席届を提出し、無断欠席をしないように促した。さらに 3、4 回目の学修プログラムは寮生による自主企画として、自分たちで学修テーマを決め、興味を深めるようにした。その結果、今年度は各回 75～90%の出席率となり、第 3、4 回学修プログラムでは、企画書の作成、講師への依頼、事前勉強会、事後報告書の作成など、主体的に学修プログラムを進める様子が見られた。



学修プログラム企画書の例

第 4 回学修プログラム「カラーコーディネートについて知ろう」

清掃指導のワークショップ

昨年度の課題として、掃除の習慣がついていない寮生・ハウスが見られ、寮生からも掃除の仕方が分からない所があるので、年度始めに掃除の仕方を教えてほしいという意見が挙げられた。そこで、今年度より、清掃指導のワークショップを行うこととした。

清掃指導のワークショップでは、SCC の清掃をしている管理会社から講師を招き、ハウス内の清掃場所の説明、それぞれの清掃の仕方や留意点などを、実演を交えて指導した。

清掃指導のワークショップの様子

【平成 25 年度】

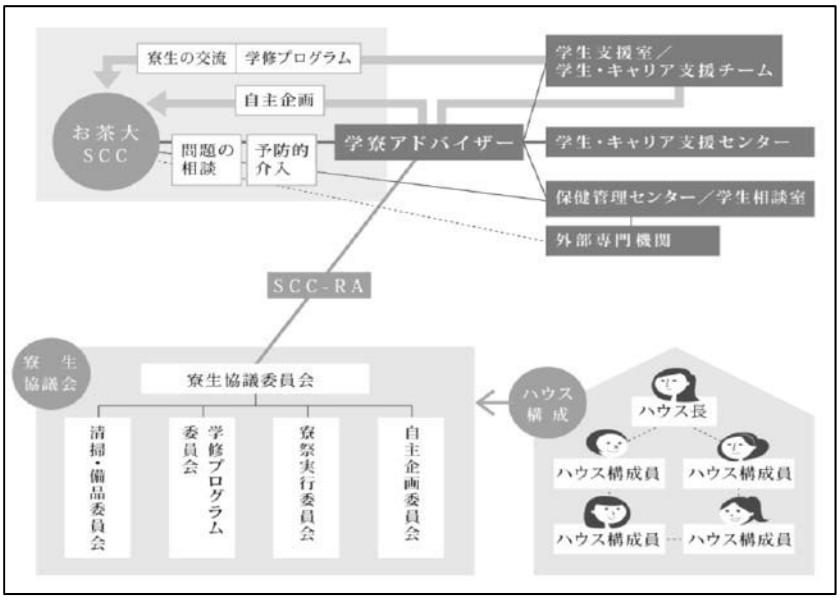
お茶大 SCC の 2 年間のプログラムを経験した寮生が卒寮する平成 25 年度より、「お茶大 SCC 新寮レジデント・アシスタント(SCC-RA) 制度」が開始した。詳しくは後述するが、SCC の理念である「共に住まい、共に成長する」ことを目指し、上級生（3 年生）4 名が寮に居住し、いつでも 1、2 年生の寮生をサポートできるようにする制度である。また平成 25 年度の活動のうち、平成 24 年度から変更があったものを抜粋して示す。

寮生協議会の委員会構成の変更

昨年度の変更により、寮生はハウス内で委員会の分担を決め、四つの委員会のいずれかに属することになった。昨年度の活動から、「清掃・ゴミ委員会」と「整備・備品委員会」を統合し「清掃・備品委員会」を設置することになった。これは清掃・ゴミ委員会と整備・備品委員会の仕事は、他の委員会と比べて相対的に仕事が少なく、活動実績が少ないこと、また、二つの委員会の活動内容が比較的近しいものであり、重複する内容もあるためである。

また、今年度から「学修プログラム委員会」を新設した。昨年度までは、学修プログラムの担当が各ハウスにいなかったため、ハウス長や限られた者で企画・運営していたがと、各ハウスに委員が存在することで、寮生がより学修プログラムに意欲的取り組むようになると考えたからである。

SCC-RA もそれぞれ担当委員会を持ち、委員会の会議にはオブザーバーとして出席した。RA は委員長のサポートをするとともに、学寮アドバイザーとの連携も深めることができた。



大学及び寮生組織の図（平成 25 年度）

学修プログラムについて

昨年度は学修プログラムの形式を、第 1 回、第 2 回は、①講師による講義、②担当ハウスでの話し合い、③全体でのディスカッション、という内容に変更をし、第 3 回、第 4 回は講演会のみとし、寮生の企画のもと行った。今年度は、各回の内容をハウスで深められるようにするため、回数を前期 2 回、後期 1 回の計 3 回に減らし、講演会と発表会を合わせて 1 回のプログラムとした。また講師は、寮生が学内の教員の中から、興味のある分野の教員に依頼をすることになった。さらに、発表会に向けて各ハウスで取り組む課題も、講師と共に寮生が考えたものを行った。

今年度第 1 回は、羽入学長の講演を聞いて、興味・関心のあるキーワードをもとに、ハウスごとに施設訪問又はインタビューを行った。第 2 回は、食物栄養学部の栄養教育学が専門の赤松利恵先生に講演を行い、課題は、「ハウスメンバーで協力して、旬の食材を使った栄養バランスのよい献立を考える」とした。最終的には SCC オリジナルの「レシピ集」を製作した。第 3 回は、文教育学部の身体運動科学が専門の水村真由美先生の講演を聞き、課題では「寮を起点とした、ウォーキングコース」の作成を行った。

発表の方法は、各ハウスでパワーポイントを使ってスライドを作成した。プレゼンテーションの技法やディスカッションの方法など、まだまだ改善の余地はあるが、反省点を次回に活かせるように取り組んでいた。出席率は年間を通して 70%前後であった。日程は土曜日の午前中を第一候補にしているが、授業や検定試験と重なることもあった。

主食			Iハウス
夏野菜のおもちゃ箱パスタ			
材料（ 5 人分）		分量	作り方（所要時間 約 40 ）分
A	めんつゆ	150cc	① Aを混ぜ合わせて、冷蔵庫に入れておく。 ② パスタを茹でて、水にさらす。 ③ ナスとズッキーニを輪切りにして、レンジで火が通るまで加熱する。（約4分） ④ オクラを茹でて、輪切りにする。 ⑤ 豚肉を茹でる。 パスタに①をかけて、野菜と肉を適当に盛り付け、レモンを絞って出来上がり。
	酢	大さじ3	
	ゴマ油	大さじ1	
	白ゴマ	少々	
ナス		1本	
ズッキーニ		1本	
オクラ		8本	
水菜		少量パック半分	
レモン		1個	
冷しゃぶ用豚肉		300g	
パスタ		500g	

おすすめポイント

備考：5人で1,000円くらい（調味料別）

第 2 回
学修プログラムで
作成した
SCC レシピ集

今後の課題

今後の課題として、寮内交流の活性化が挙げられる。シェアハウス方式により同じハウス内の交流は活発で、日常生活を共にすることで、自分とは異なる価値観を受け入れながら、人間関係の形成能力は育まれている。一方で、ハウス間の交流は、学修プログラムを含め SCC 全体での行事は行われているものの、ハウス内の交流に比べるとまだまだ改善の余地がある。これは寮生からも度々伝えられていることで、寮生自身からのアクションが期待される。また平成 25 年度末には、ハウスと居室の組み替え（居室替え）を行う。新たなメンバーと生活と共にしながらも、前のハウスメンバーとも交流が継続されることにより、寮内の交流はますます広がるのではないかと思われる。

（3）学生寮シンポジウム　～大学の戦略と教育可能性～

概要

開催日時：平成 24 年 8 月 31 日（金）13：00～16：00
開催場所：お茶の水女子大学　共通講義棟 2 号館 201 室
主催　　：お茶の水女子大学　学生支援センター
　　文部科学省 特別経費プロジェクト
　　『統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証』
後援　　：独立行政法人　日本学生支援機構

趣旨および内容

大学生の協調性や忍耐力の欠如が問題視される中、学生寮のもつリビングラーニングコミュニティ機能が着目されている。

本シンポジウムでは、先進的な取り組みをしている四つの大学（首都大学東京、京都産業大学、立命館アジア太平洋大学、お茶の水女子大学）の学生寮をとりあげ、そこでの事例について、実践課題を含めてご紹介いただくとともに、フロアディスカッションでの質疑応答も行った。

本シンポジウムの案内ポスター（案内ちらし表面）

学生寮
～大学の戦略と教育可能性～
シンポジウムのご案内

大学生の協調性や忍耐力の欠如が問題視される中、学生寮のもつリビングラーニングコミュニティ機能が着目されています。本シンポジウムでは、先進的な取り組みをしている4つの大学の学生寮をとりあげ、そこでの実践課題を含めた議論を行いたいと考えております。

8.31
13:00～16:00
Fri

主催　お茶の水女子大学 学生支援センター
文部科学省 特別経費プロジェクト
「統合型学生支援システムの構築による女子高等教育機会の保証」

日時　平成24年8月31日(金)13:00～16:00

講師

『桜都寮』の四季
～首都大学東京の学生支援～
西村 和夫 氏（首都大学東京 学生サポートセンター副センター長）
今関 理恵 氏（首都大学東京 学生課長）

自主性・社会性を養う
一年生中心の「教育寮」の実際
渕上 知己 氏（京都産業大学 学生部課長(寮務担当)）
井上 嘉規 氏（京都産業大学 学生部事務部長）

(仮題)APUの学生寮 APハウスでの実践的な取り組み
～職員とRA(レジデントアシスタント)の視点から～
松本 淳 氏（立命館アジア太平洋大学 スチューデント・オフィス 課長補佐）
力丸 晃也 氏（立命館学園 文学部教務職員）

お茶大SCCの取り組み
～学生支援プログラムの実践と課題～
桂　瑠以 氏（お茶の水女子大学 学生支援センター 講師）
瀬田 すみ恵 氏（お茶の水女子大学 お茶大SCC サポーター）
司会　望月 由起（お茶の水女子大学学生支援センター 准教授）

参加費　無料(申込制)
(シンポジウム後の情報交換会に参加を希望される方は参加費として1,000円お支払いただきます)

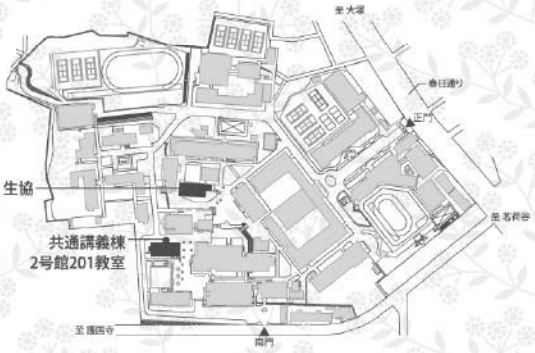
定員　150名(先着順)
★本シンポジウムでご紹介する「お茶大SCC」見学会をシンポジウム開始前(12:00～12:30予定)に実施いたします(先着30名)。ご希望の方は参加申し込みの際に、お申込みください。集合場所等については、参加いただく方に別途ご連絡いたします。

参加申込方法　参加申込期限　8月24日(金)
期限までにお茶の水女子大学、学生・キャリア支援チームの下記メール宛にお申込み下さい。件名を「8/31学生寮シンポジウム」とし、①氏名、②所属、③職名、④連絡先メールアドレス、⑤お茶大SCC見学会参加希望の有無、⑥情報交換会出席の有無、をご記入下さい。複数名で申込まれる場合にもお手数ですが、それぞれの方の上記①～⑥までご記入いただけますようお願いいたします。別添の申込用紙にご記入の上、下記FAX番号へ送信いただきましても申込みいただけます。
(受信後3日以内に確認のメールまたはお電話をさせていただきます。)

プログラム　司会　望月 由起（お茶の水女子大学学生支援センター 准教授）

12:30	開場
13:00～13:10	開会挨拶　羽入佐和子(お茶の水女子大学 学長)
13:10～13:40	首都大学東京の取り組み事例
13:40～14:10	京都産業大学の取り組み事例
14:10～14:40	立命館アジア太平洋大学の取り組み事例
14:40～15:10	お茶の水女子大学の取り組み事例
休憩	
15:20－15:55	フロアディスカッション(記入された質問への回答)
15:55－16:00	閉会挨拶　耳塚寛明(お茶の水女子大学　理事・副学長)
情報交換会参加者の方は本学生協へ移動	
16:20－18:00	情報交換会(本学生協にて開催)　参加費1000円

会場　お茶の水女子大学
共通講義棟2号館201教室
アクセスについては別紙「会場案内」参照



お申し込み・お問い合わせ
お茶の水女子大学 学生・キャリア支援チーム
〒112-8610　東京都文京区大塚2-1-1学生センター棟2階
TEL 03-5978-2646　FAX 03-5978-5894
アドレス　gakuryo-sympo@cc.ocha.ac.jp(申込用)

本シンポジウムのプログラム（案内ちらし裏面）

ほかにも、シンポジウムの前後の時間に、希望者に対して「お茶大 SCC 見学会」を実施するとともに、「情報交換会」を開催した。「お茶大 SCC 見学会」には 102 名（シンポジウム参加者の 50.3%）、「情報交換会」には 73 名（シンポジウム参加者の 36.0%）の参加があった。

本シンポジウムにおける講演資料やフロアディスカッション内容などは、報告書としてまとめており、TeaPot（http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/）からも PDF 形式でダウンロード可能としており、広く公開している。

課題と展望

本シンポジウムは、大学生の協調性や忍耐力の欠如が問題視される中で着目されはじめた「学生寮のもつリビングラーニングコミュニティ機能」をとりあげ、先進的な取り組みをする四つの大学の学生寮での実践事例を広く提供することを目的の一つとして開催したものである。そもそも学生寮に焦点をあてたシンポジウムは極めて珍しく、特定のテーマに特化して「深める」ことよりも、まずは、先進的な実践を「大学の戦略と教育可能性」という観点から「広める」ことを目指してのことである。

シンポジウムの前半では、首都大学東京・京都産業大学・立命館アジア太平洋大学・お茶の水女子大学それぞれの学生寮、特に戦略的に教育機能をもたせている学生寮での実践報告を行った。参加者アンケートによれば、参考になったとの声（「大いに参考になった」＋「参考になった」の回答）がいずれの報告でも 97%を超えており、多くの参加者から好評であったことが示されている。

シンポジウムの後半では、各大学の報告に対するディスカッションペーパーをもとに、フロアディスカッションを行った。参加者アンケートによれば、参考になったとの声（「大いに参考になった」＋「参考になった」の回答）がおよそ 9 割に達しており、概ね好評であったことが示されている。ただし、多くの広範にわたる意見・質問が寄せられたにもかかわらず、フロアディスカッションにあてる時間を予定よりも短縮し、質問をまとめて講演者に投げかける形式とせざるを得なかったことは運営上の大きな課題である。参加者アンケートの自由記述からは、「ディスカッションの時間が短い（短くなったのが残念だ）」「フロアから直接口頭で質問をしたい」といった意見もみられた。「時間の短さ」に関する意見・要望は、各大学からの報告に対しても挙げられており、運営上の課題であるとともに、参加者の関心の高さが表れた結果ともいえるだろう。

参加者の関心の高さは、シンポジウムの前後に希望者に対して実施した「お茶大 SCC 見学会」や「情報交換会」への参加状況からもみてとれる。

シンポジウムの開始前に実施した「お茶大 SCC 見学会」は「先着 30 名」という枠で募集を行ったが、早々にこの枠は埋まってしまった。その後も希望者が多くみられたため、見学会を予定より早い時刻から 3 回にわたって実施することとし、計 102 名もの方に見学をしていただいた。多くの方に見学していただくことができた一方で、参加者アンケートの自由記述からは、「難しいと思うのだが」という前置きつきであるが、「シェアハウス内を見学したい」といった要望もみられた。学生が実際に生活している場を「見学の場」として示すことは難しい問題であるが、どのような方法であればその様子を示すことができるのか検討していきたい。

シンポジウム終了後に実施した「情報交換会」にも 73 名の方に参加いただいた。ディスカッションペーパーでは、「共通質問」とは別に「各大学への質問」を募り、多くの具体的な質問・意見が寄せられたが、その多くに対しては、シンポジウム内での対応ができなかった。しかし「情報交換会」という場を別に設定し、多くの方に参加いただくことで、参加者個々のおかれている状況のやりとりも行いながら、報告者と議論を重ねている様子が随所でみられた。さらにいえば、報告者とのやりとりのみならず、参加者同士での挨拶を兼ねての情報交換も活発に行われていた。これまで決して盛んであったとはいえない「学生寮に関わる担当者間でのネットワーク作り」という点からも、本シンポジウムの果たした意義は大きい。

先にも述べたが、本シンポジウムは、特定のテーマに特化して「深める」ことよりも、まずは、そこでの先進的な実践を「大学の戦略と教育可能性」という観点から「広める」ことを目的の一つとしていた。今後、より発展させていくためにも、「より多くの実践事例を提供する機会」を継続的に設けていくこととともに、「関心の高い、特に、関係者の間で関心の高いテーマに特化して「深める」機会」も視野にいれていきたい。

2012 年 2 月、大学教育学会課題研究委員会（「現代における学生支援の課題と展望」）とお茶の水女子大学学生支援センターの共催により、本シンポジウムの企画につながる研究会を 30 名程度の規模で開催した。そこでは、福岡女子大学とお茶の水女子大学の学生寮での実践、中でもピア・サポートの側面に焦点をあて、学生も交えての議論を行い、そこでの課題についても掘り下げることができた。今後は、こうした機会をワークショップ形式で設けることも検討していきたい。例えば、SWOT 分析などを用いて各大学・学生寮の状況や課題を可視化し、他との比較検討や議論をすすめるような場も有益ではなかろうか。

最後に、今後のテーマ選定の参考にすべく、ディスカッションペーパーに寄せられた質問・意見の中から、主なものを挙げておきたい。

・集団生活になじめない学生への対応
・寮生活やそこでのプログラムの成果（それを測る方法も含めて）
・清掃や門限などの寮則指導（違反者への対応、ペナルティなども含めて）
・盗難や寮生間のトラブル対応
・退寮希望者や部屋移動希望者（複数名同室の場合）への対応
・（リーダーシップをとるような）意識の高い寮生（班長、RA、ハウス長など）の選考・育成方法、待遇（インテンシブ）・優先権（プライオリティ）
・寮生が寮で暮らしていない学生に与える影響（効果）
・学生寮を通しての学生支援が大学としての評価にいかにつながっているか
・大学側の財務管理・経済的補助（寮費、空室負担金、人件費、プログラム費用など）
・学生寮運営にかかわる教職員に期待されるスキル
・教育機能をもつ学生寮を計画する際に空間的に配慮すべきこと

いずれも「学生寮のもつリビングラーニングコミュニティ機能」にかかわる重要なテーマであり、今後、多くの大学にとって「深める」ことが求められる観点であると思われる。

当日参加者所属一覧

本シンポジウムでは、定員を 150 名（先着順）としたが、「大学・短期大学職員」117 名をはじめとして、「大学・短期大学教員」「企業」「公務員」「学生」など、定員を超える多くの方々からの参加があった。

当日参加者の所属先、教職員区分などは以下のとおりである（本学関係者、事例紹介講演者を除く）。

当日参加者所属一覧（大学・短大）

所属（※括弧内は人数）	内部組織名（※括弧内は人数、空白は未記入）	国公私立区分	教職員区分
小樽商科大学	学務課	国	職員
お茶の水女子大学	人間文化創成科学研究科	国	教員
九州工業大学(2)	情報工学部　学生係	国	職員
	工学部	国	職員
京都工芸繊維大学	学生サービス課　学生生活係	国	職員
京都大学	女性研究者支援センター	国	教員
鹿屋体育大学	学生課　生活支援係	国	職員
静岡大学	学生生活課	国	職員
島根大学(2)	教育・学生支援部　学生支援課(2)	国	職員
筑波大学	学生部　学生生活課	国	職員
電気通信大学(3)	学生課	国	職員
		国	教員
		国	職員
東京医科歯科大学	学務部　学生支援課	国	職員
東京外国語大学(2)	学生課	国	職員
	留学生課	国	職員
東京学芸大学	学務部　学生課　課外教育係	国	職員
東京芸術大学	学生支援課	国	職員
東京大学(9)	本部　奨学厚生課(3)	国	職員
	資産管理部　管理課(2)	国	職員
	大学院　農学生命科学研究科・農学部　国際交流室(2)	国	教員・職員
	教養学部等　学生支援課	国	職員
	施設部	国	職員
東京農工大学	学務部　学生総合支援課	国	職員
富山大学		国	教員
長岡技術科学大学	学生生活支援係	国	職員
長崎大学	学生支援部　学生支援課　生活支援班	国	職員
名古屋工業大学	学生生活課	国	職員
奈良女子大学(2)	研究院　人文科学系	国	教員
	文学部	国	教員
一橋大学	学務部　学生支援課　学生支援係	国	職員
兵庫教育大学(2)	大学院　学校教育研究科	国	教員
	教育研究支援部　学生支援課	国	職員
広島大学(2)	教育・国際室　学生生活支援グループ(2)	国	職員
三重大学(2)	学務部　学生サービスチーム(2)	国	職員
山口大学(5)	学生支援部	国	職員
	学生支援部　学生支援課(2)	国	職員
	工学部　会計課	国	職員
	工学部　学務課	国	職員
青森県立保健大学	教務学生課	公	職員
岩手県立大学	学生支援室　学生支援課	公	職員
国際教養大学	学生課　学生支援チーム	公	職員
首都大学東京(4)	学生サポートセンター	公	職員
	学生サポートセンター　キャリア支援課	公	職員
	学生サポートセンター　学生課　学生係	公	職員
	管理部　国際センター事務室　留学生支援係	公	職員
広島市立大学	事務局　教務学生室	公	職員
福岡女子大学(2)	学務部　学生支援班	公	教員
	学務部　学生支援班	公	職員
横浜市立大学	アドミッションズセンター	公	教員
亜細亜大学	厚生課	私	職員
跡見学園女子大学	学務部　学生課	私	職員

所属（※括弧内は人数）	内部組織名（※括弧内は人数、空白は未記入）	国公私立区分	教職員区分
エリザベト音楽大学	総務部　学生寮	私	職員
桜美林大学(2)	学生センター　学生生活支援課(2)	私	職員
大阪音楽大学	学務事務部門	私	職員
岡山理科大学	学務部	私	職員
学校法人佐野学園	法人本部　総務部	私	職員
学校法人東洋学園	法人本部	私	職員
学校法人文京学園	法大事務局　施設担当	私	職員
神奈川大学	入試センター事務部	私	職員
関西大学	学生生活支援グループ	私	職員
関西学院大学	学生部　学生課(学生生活カウンター)	私	職員
神田外語大学(2)	キャリア教育センター	私	職員
	教務部　国際交流課	私	職員
九州産業大学(2)	学生部　厚生課(2)	私	職員
京都光華女子大学	学生生活グループ	私	職員
京都女子大学	学生部	私	職員
京都精華大学	学長室	私	職員
京都ノートルダム女子大学	学生部　学生課	私	職員
熊本学園大学	学生課　厚生係	私	職員
慶應義塾大学	学生部	私	職員
神戸松蔭女子学院大学	学生課	私	職員
国立音楽大学(2)	学務部	私	職員
	学務部　学生支援課	私	職員
三育学院大学	英語コミュニケーション学科	私	教員
至学館大学	経営管理局　学生課	私	職員
四天王寺大学	学生支援センター	私	職員
芝浦工業大学(2)	学事部　学生課(大宮)(2)	私	職員
上智大学(2)	学生センター(2)	私	職員
聖徳大学	学寮課　兼　国際交流課	私	職員
昭和音楽大学	学務部　学生課	私	職員
聖心女子大学	学寮部	私	職員
洗足学園音楽大学(2)	学務部　学生生活課(2)	私	職員
創価女子短期大学(2)	短大事務室　学生課(2)	私	職員
創価大学(2)	学生部	私	職員
	学生部　学生課	私	職員
中部大学(2)	学生部　学生課	私	職員
	工学部　応用化学科　兼　学生部	私	職員
津田塾大学(2)	学生生活課	私	職員
		私	教員
天理大学(2)	学生部	私	職員
	豊井ふるさと寮	私	職員
東海大学	理事長室文書課	私	職員
東京女子体育大学	管財課	私	職員
東京女子大学(4)	現代教養学部　人文学科　日本文学専攻	私	教員
	教育研究支援部	私	職員
	教育研究支援部　学生生活課	私	職員
	大学運営部	私	職員
東京電機大学(2)	国際センター(2)	私	職員
東京理科大学	基礎工学部	私	教員
同志社大学	国際連携推進機構　国際センター　留学生課	私	職員
東洋大学		私	教員
南山大学	学務部　国際教育センター事務室	私	職員
日本大学	本部 学生支援部 学生課	私	職員
広島文教女子大学	学園統括部	私	職員
フェリス女学院大学	学生課	私	職員
美作大学	学生部	私	職員
宮城学院女子大学	学生支援グループ	私	職員
武蔵野音楽大学(2)	学生部　学寮(2)	私	職員
明治薬科大学		私	職員
立命館アジア太平洋大学	教育開発・学修支援センター	私	教員
ルーテル学院大学	学生支援センター	私	職員
麗澤大学(2)	学務部	私	職員
	学務部　学生支援グループ	私	職員
早稲田大学	学生部レジデンスセンター	私	職員
和洋女子大学	学生課	私	職員

メディアへの掲載など

本シンポジウムに対してはメディアの関心も高く、開催告知記事が 3 紙に掲載された。当日の取材メディアは 8 紙にのぼり、3 紙に取材記事が掲載されている。記事内容については、掲載各紙より許諾を得た上で、報告書に転載している。

・開催告知記事

・教育学術新聞　平成 24 年 7 月 25 日（水）　2 面
「学生寮シンポ　戦略と教育の可能性」

・毎日新聞　平成 24 年 8 月 15 日（水）　夕刊　5 面
「もよおし」

・毎日新聞　平成 24 年 8 月 24 日（金）　朝刊　35 面
「学びの場としての学生寮」

・取材記事

・読売新聞　平成 24 年 9 月 6 日（木）　朝刊　14 面
「学生寮の教育的効果と課題」

・愛媛新聞　平成 24 年 9 月 12 日（水）　20 面
「人間形成機能に注目」

・日経新聞　平成 24 年 9 月 17 日（月）　朝刊　19 面
「学生寮、規律継承カギ」

・当日取材メディア（順不同）

読売新聞、朝日新聞、日経新聞、神戸新聞、愛媛新聞、教育学術新聞、
日経 BP、東洋経済新報社

（4）本学の学生寮調査　－学生寮の生活環境及び人間関係に着目して－

調査の概要

本調査では、三つの学生寮の寮生を対象に、生活実態や満足度を調査して、比較検討することを目的とする。具体的には、寮に関する情報、施設・設備、寮費や寮の規則、寮の運営機関、非常時の対応、対人関係など多岐にわたるもので、いずれも、寮生の実情をふまえ、本学の学生支援活動をより効果的に実行するための基礎資料として活用することを目的とする。

方法

・調査時期と調査対象者

平成 23 年 11 月～12 月に、お茶の水女子大学学生寮寮生 515 名を対象として調査を実施した。有効回答数は 183 名（35. 5%）であり、各寮での内訳は、小石川寮寮生 24 名（36. 3%）、国際学生宿舎寮生 133 名（33. 2%）、お茶大 SCC 寮生 26 名（53. 0%）であった。

・調査方法

調査対象者に個別記入形式の質問紙を配布し、各学生寮に回収箱を設置して回収を行った。

・調査項目

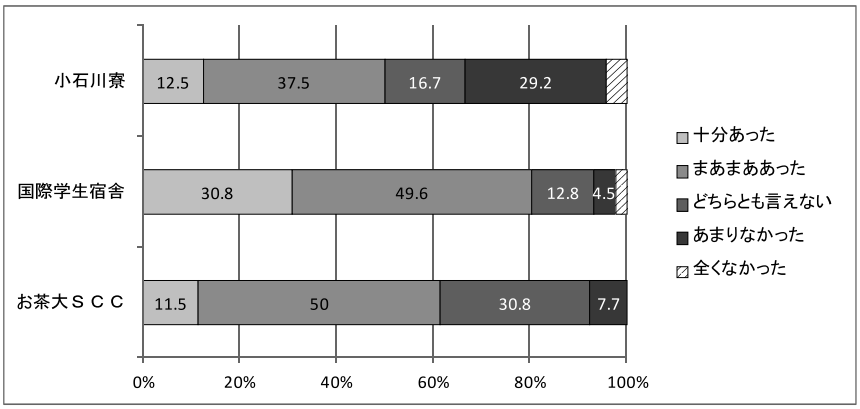
「寮に関する情報」8 項目、「施設・設備に関する満足度・要望」10 項目、「寮費や寮の規則に関する認知度・満足度」6 項目、「寮の運営機関に関する認知度・要望」5 項目、「寮内での非常時の対応の認知度」2 項目、「寮内の対人関係」3 項目について回答を求めた。

結果と考察

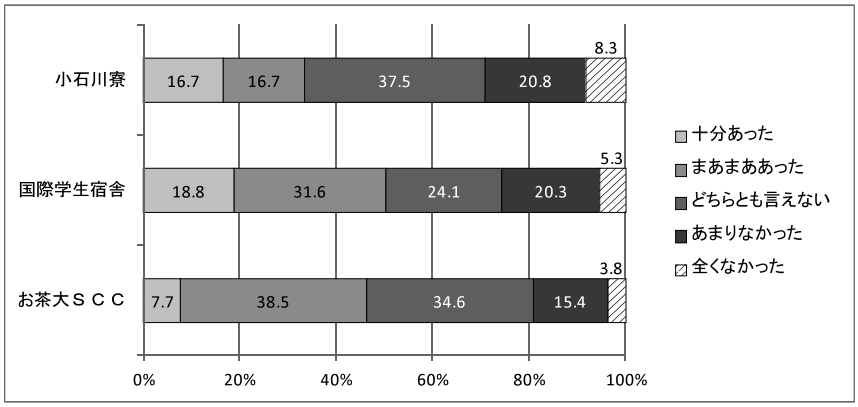
1）寮に関する情報

入寮前に、学生寮についての下記の情報をどの程度受け取っていたかを尋ねた。その結果、寮に関わる諸経費は、情報が「十分あった」「まあまああった」が過半数であり、全般的に情報があったことが示された。一方、寮の管理システムや寮の規則は「あまりなかった」「全くなった」が過半数であり、全般的に情報が少ないことが示された。したがって、これらの情報についても、学生寮のホームページや配布資料等で、分かりやすく明示していくことが必要と考えられる。

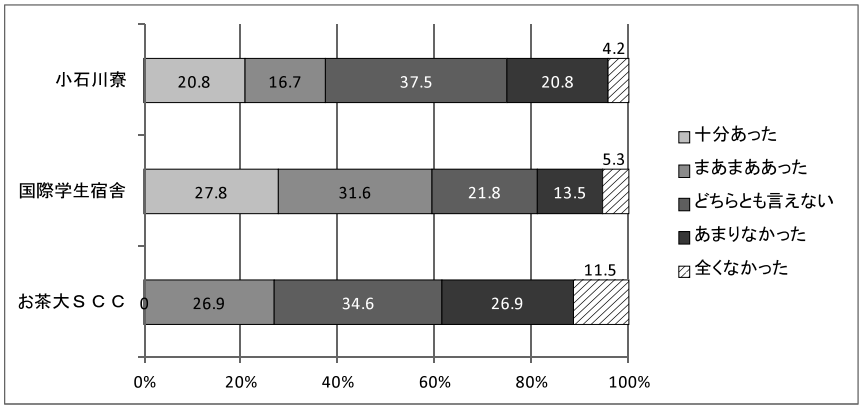
図表１-１：寮に関わる諸経費



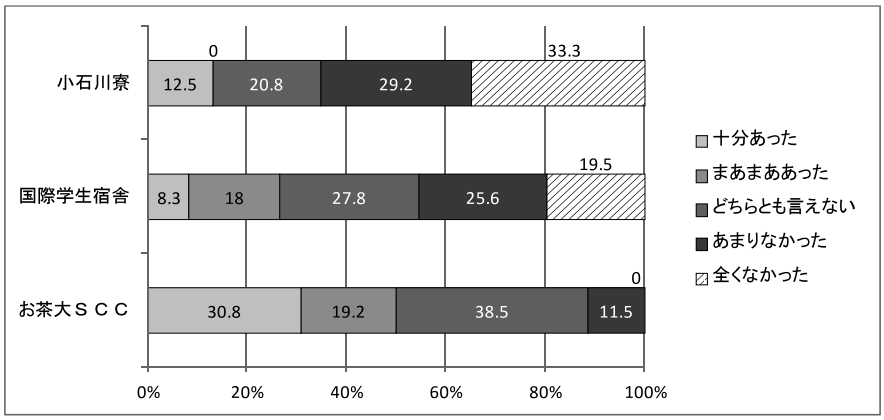
図表１-２：寮の施設や設備



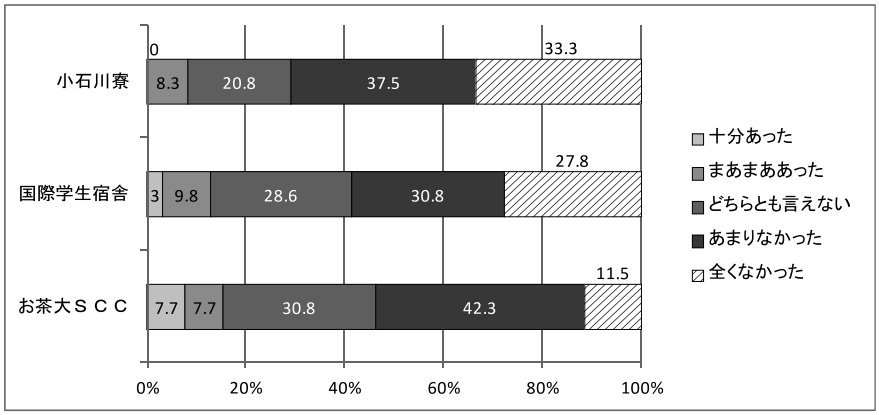
図表１-３：部屋の設備や家具



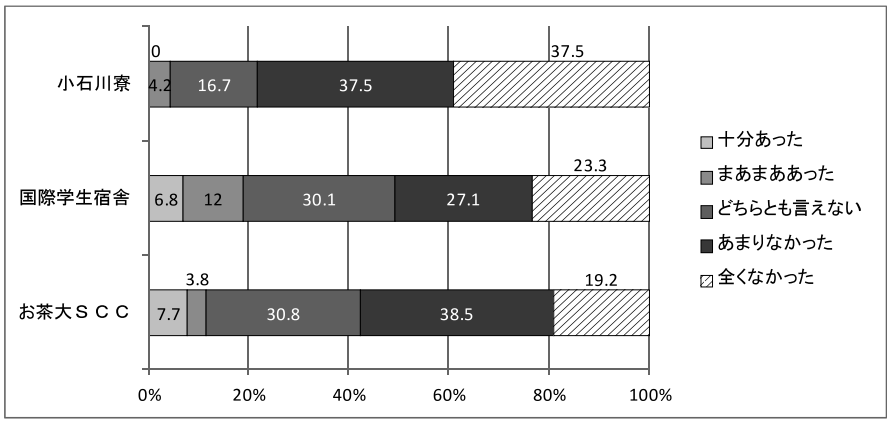
図表１-４：寮内でのインターネットの利用



図表１-５：寮の管理システム

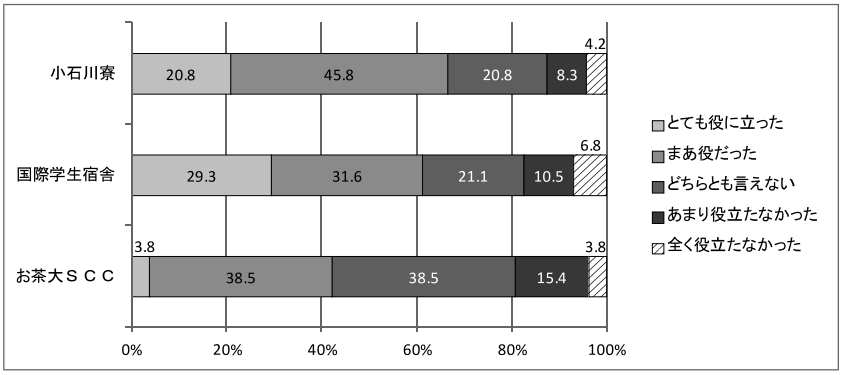


図表１-６：寮のルールや規則

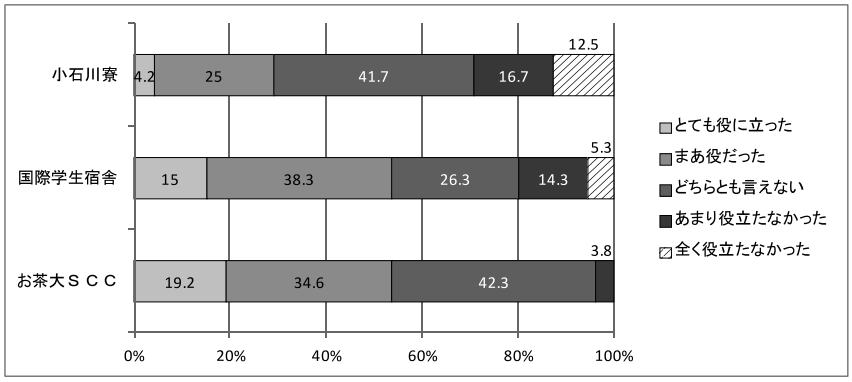


次に、寮に関する情報媒体が寮生活に役立ったかを尋ねた。その結果、寮ごとに見ると、ホームページについては、小石川寮、国際学生宿舎では「とても役立った」「まあ役立った」という回答が過半数だったが、お茶大 SCC では 40%程度と低い傾向が示された。一方、印刷物については、国際学生宿舎、お茶大 SCC では過半数だったが、小石川寮では 30%程度と低い様子が示された。

図表１-７：ホームページの情報



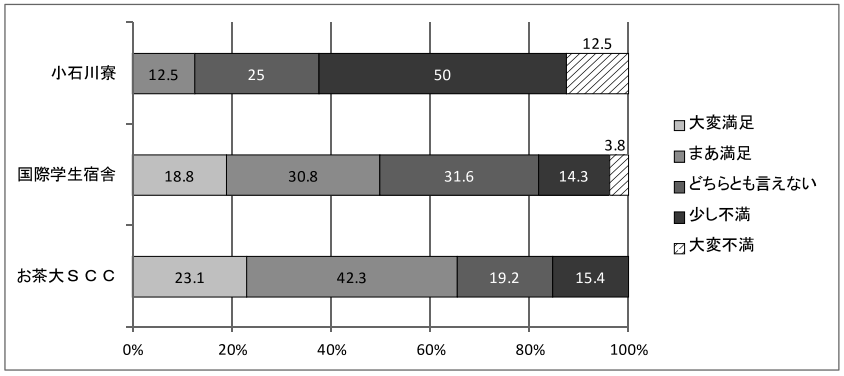
図表１-８：印刷物（寮規程、ガイドブック等）



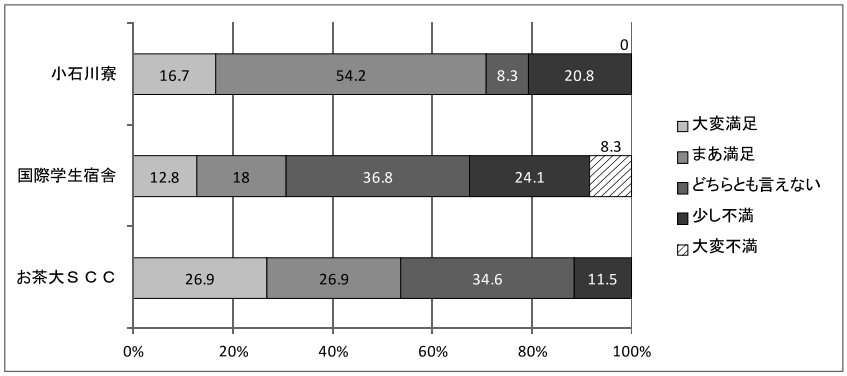
2）施設・設備の満足度・要望

居室や以下の設備への満足度について尋ねた。その結果、寮ごとに見ると、小石川寮では浴室、トイレの満足度は高いものの、居室、補食室の満足度は低く、国際学生宿舎では全般的に満足度が低く、お茶大 SCC では全般的に満足度が高いことが示された。満足度が低い理由として、自由記述では、居室の狭さや古さ等の設備の問題や、浴室や補食室の使い方が悪い、騒ぐなどの迷惑行為等の使い方の問題が挙げられた。このことから、設備と使い方の両方の改善を行っていくことが求められているといえよう。

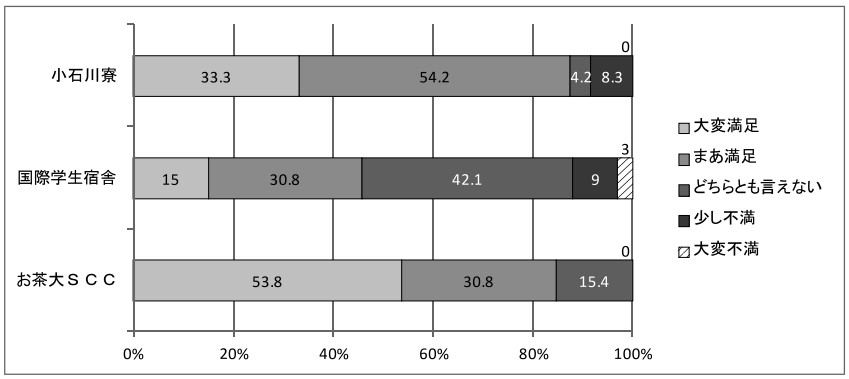
図表１-９：居室全般（広さ・明るさ・清潔さなど）



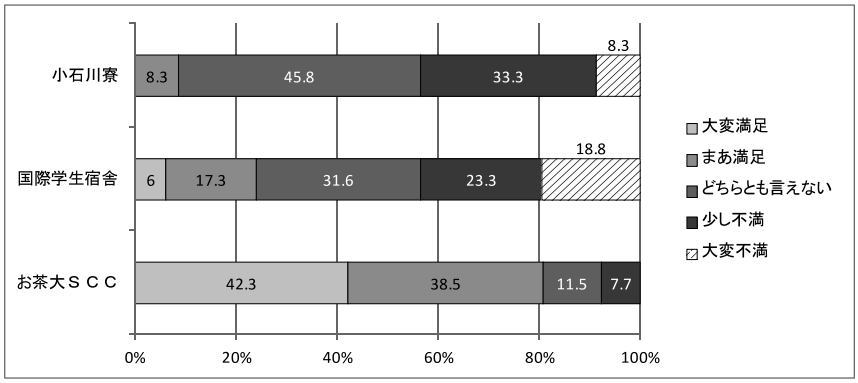
図表１-10：浴室



図表１-11：トイレ

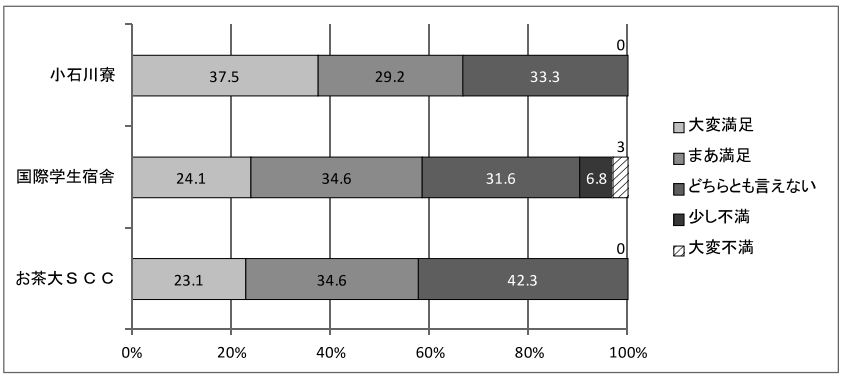


図表１-12：ハウスリビング（SCC）・補食室（国際・小石川）

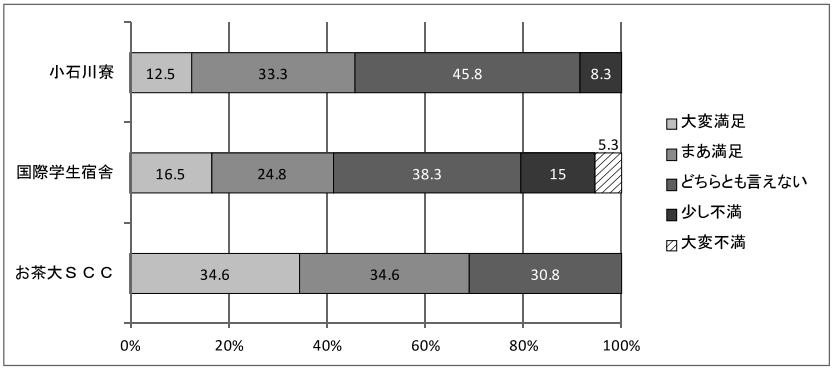


次に、以下の共有スペースへの満足度を尋ねた。その結果、ゴミ置き場、メールボックスは、全ての寮で満足という回答が過半数であり、全般的に満足度が高いことが示された。寮ごとに見ると、お茶大 SCC では全般的に満足度が高い一方、小石川寮ではエントランス、駐輪場の満足度が低く、国際学生宿舎では洗濯室の満足度が低いことが示された。

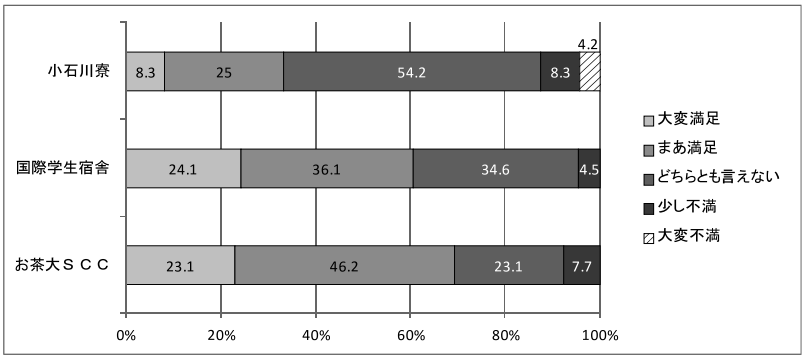
図表１-13：ゴミ置き場



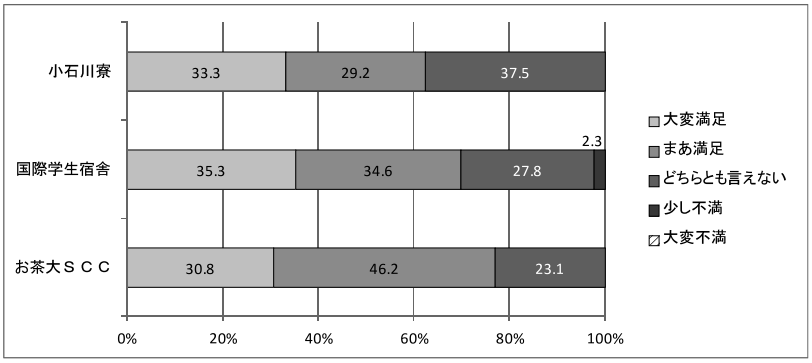
図表１-14：洗濯室



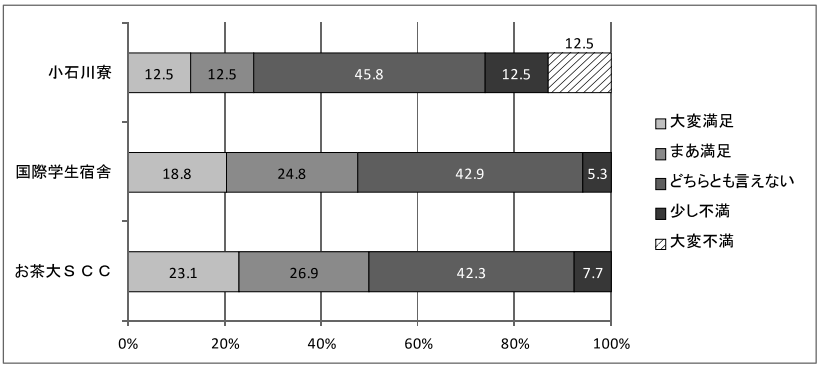
図表１-15：エントランス



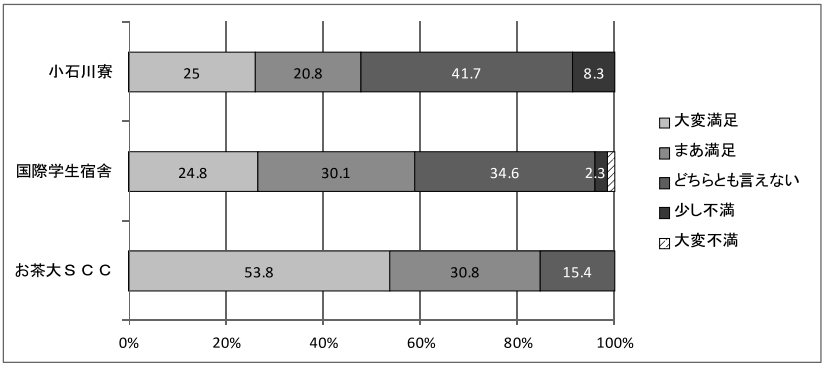
図表１-16：メールボックス



図表１-17：駐輪場



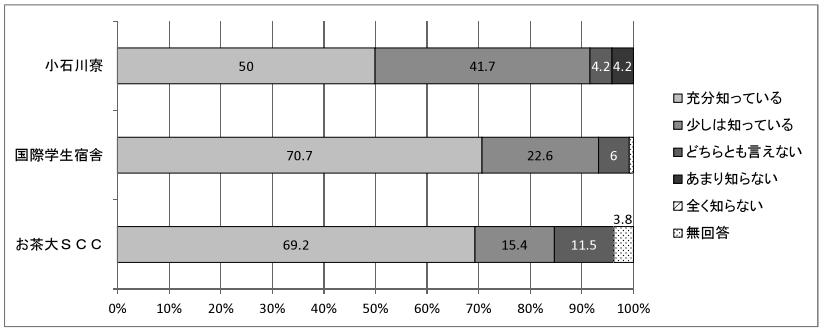
図表１-18：共有ラウンジ・ロビー・ホール



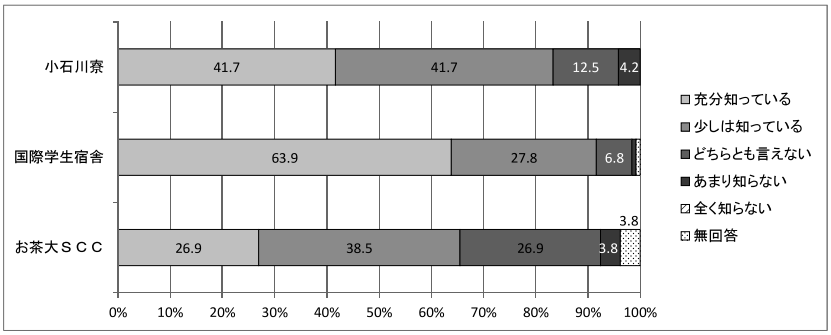
3）寮費や寮の規則の認知度・満足度

寮費や寮の規則をどのくらい認知しているか、またどのくらい満足しているかについて尋ねた。以下の規則の認知度を尋ねた結果、すべての規則について、過半数の回答者が知っていると回答していることが示された。このことから、規則については、多くの寮生が認知しているものと考えられる。

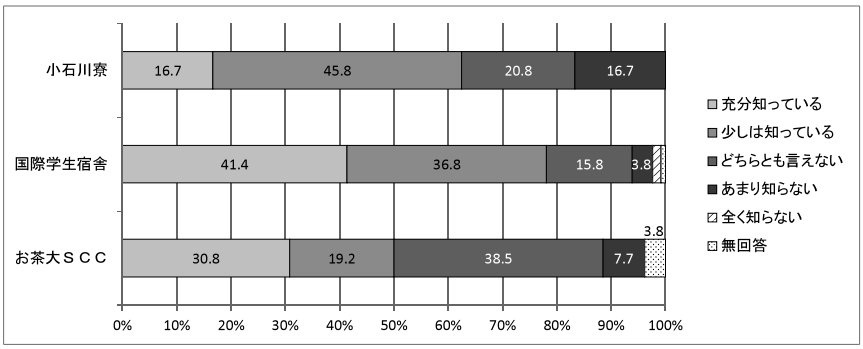
図表１-19：門限の規則



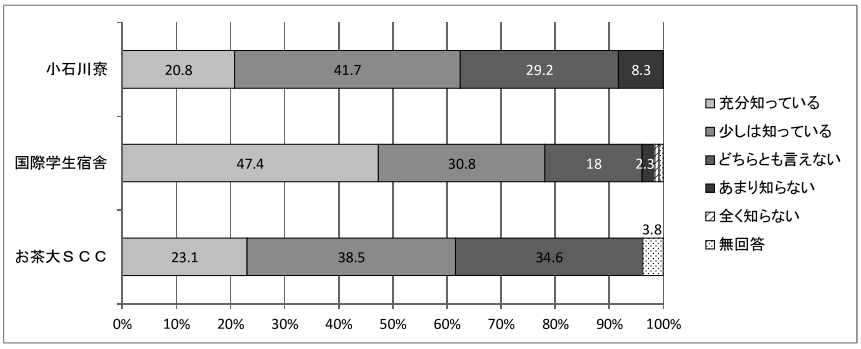
図表 1 - 20：寮費の規則



図表 1 - 21：共有施設・設備の使用の規則

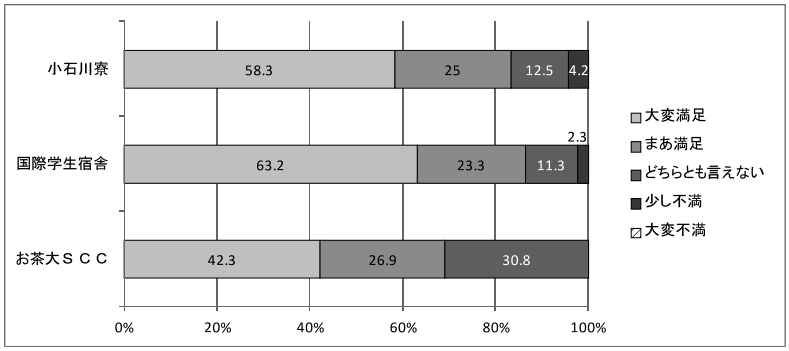


図表 1 - 22：ゴミ処理の規則

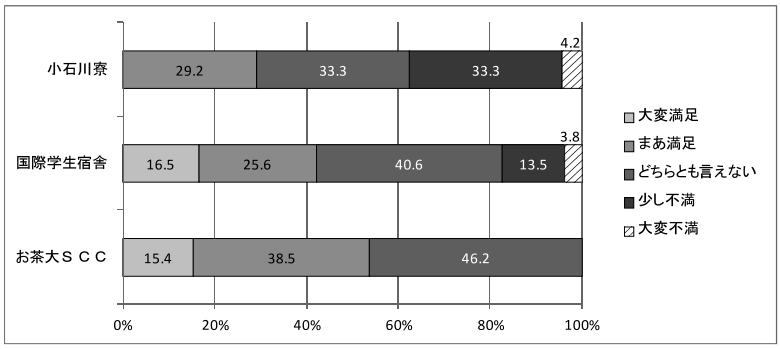


次に、寮費、寮の規則の満足度を尋ねた結果、寮費の満足度は全般的に高い一方、寮の規則の満足度は、お茶大 SCC では 53.9%、国際学生宿舎では 42.1%、小石川寮では 29.2%が「大変満足」及び「まあ満足」と回答していることが分かった。自由記述では、門限、寮費などの規則の改善や、設備や備品の使用のルールが守られていないといった使い方の問題が挙げられており、こうした規則について、寮生のニーズも聞きながらルールを見直し、明示していく必要があると考えられる。

図表 1 - 23：寮費の満足度



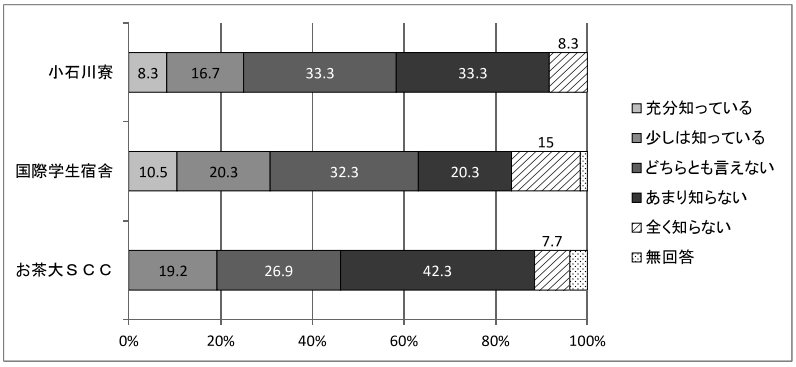
図表 1 - 24：寮の規則の満足度



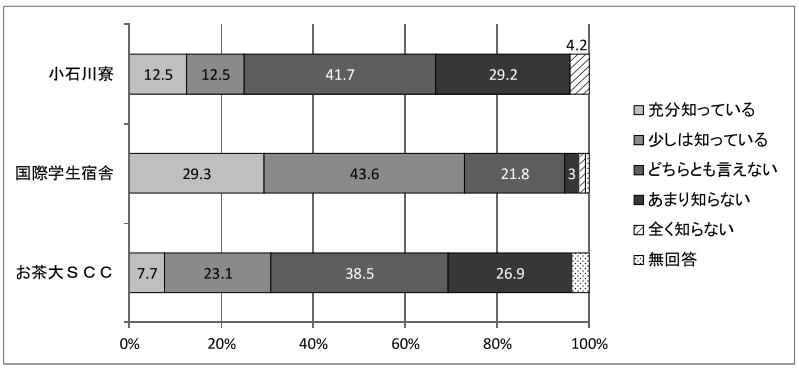
4）寮の運営機関の認知度・要望

以下の寮の運営機関を認知しているかについて尋ねた。その結果、（小石川寮、国際学生宿舎の）自治会、（お茶大 SCC の）学寮アドバイザーの認知度はある程度高いものの、管理人、警備員は、小石川寮、お茶大 SCC ではあまり認知されておらず（それぞれ、管理人：25%、30.8%、警備員：25%、7.7%）、学生・キャリア支援チームは、全ての寮であまり認知されていないことが示された（それぞれ、25%、30.8%、19.2%）。これらの運営機関は、寮で個々の重要な役割を担っており、どの機関がどのような役割をしているかを寮生に理解される必要があるため、今後、それぞれの役割について周知していく必要があると考えられる。
また、要望として、自由記述では、①寮生への対応の改善、②自治会の負荷が大きすぎる・自治会自体が必要なのかという疑問などが挙げられた。

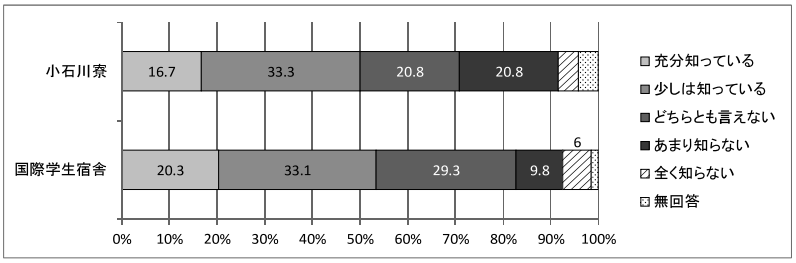
図表１-25：学生・キャリア支援チーム



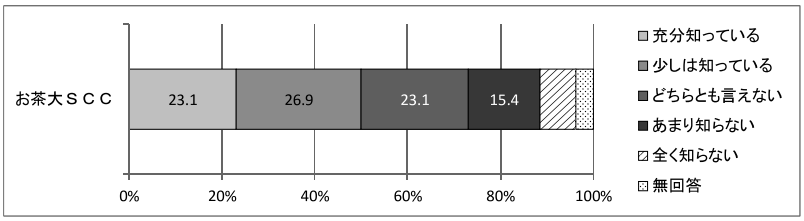
図表１-26：管理人



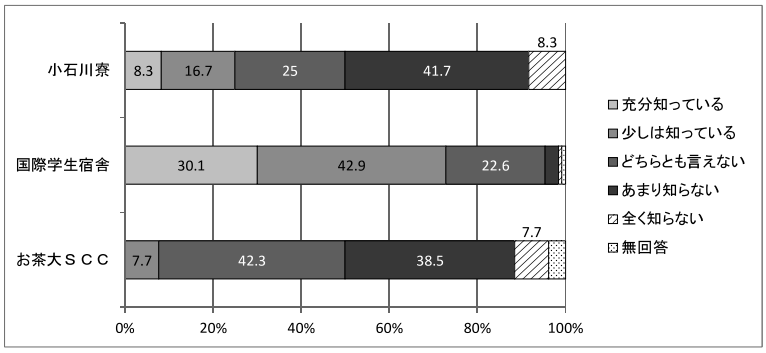
図表１-27：自治会（国際学生宿舎・小石川寮のみ）



図表１-28：学寮アドバイザー（SCC のみ）



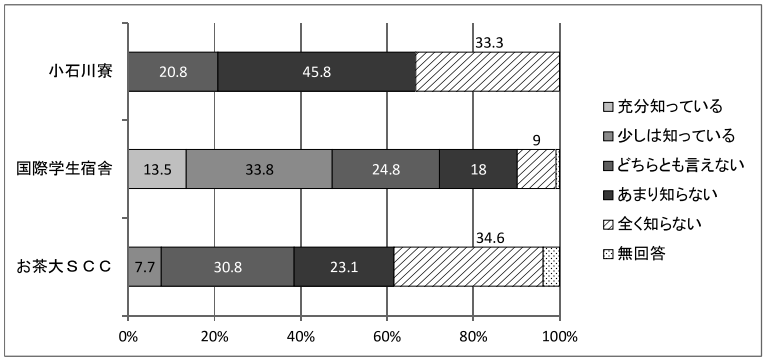
図表１-29：警備員



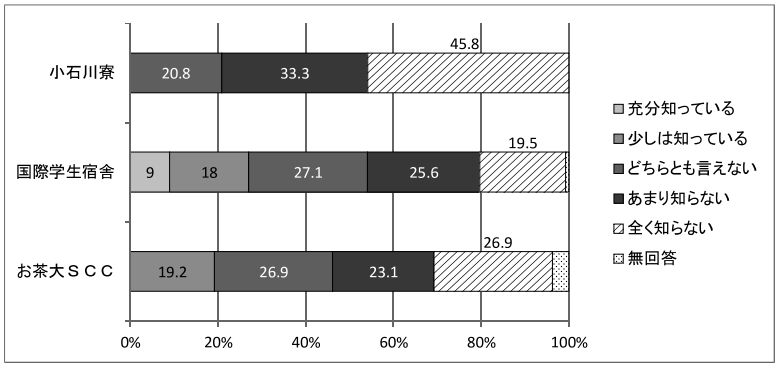
5）寮内での非常時の対応の認知度

寮内での非常時の対応について知っているか尋ねた。その結果、災害時の対応を十分知っていると回答した者はどの寮でも少なく（それぞれ 0%、13.5%、0%）、病気になった時の対応も十分認知されていないことが示された（それぞれ 0%、9%、0%）。したがって、これらの対応について、今後各寮で周知を徹底させていくことが必要と考えられる。

図表１-30：災害時の対応



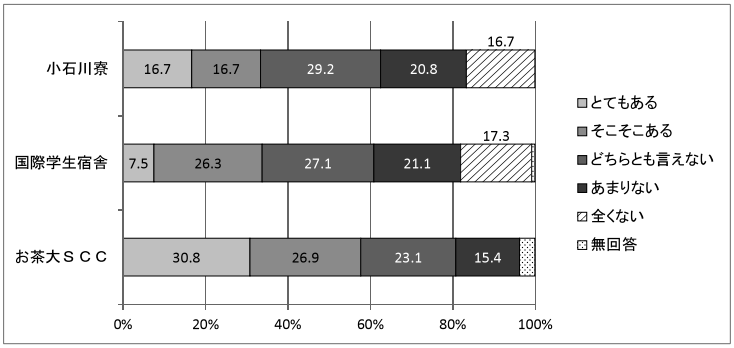
図表１-31：病気になった時の対応



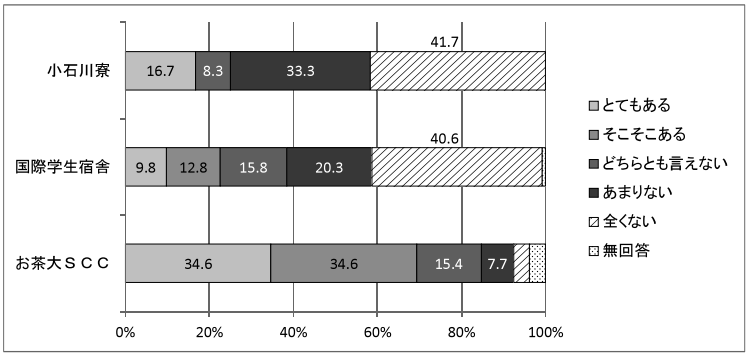
6）寮内の対人関係

寮内での対人関係について、以下の交流をどのくらい行っているか尋ねた。その結果、全般的に、お茶大 SCC では交流が多く行われている一方、小石川寮や国際学生宿舎では、補食室などの共有スペースで一緒に過ごす機会がとてもあると回答した者はそれぞれ 16.7%、9.8%であり、行事やパーティーなどを一緒に楽しむ機会がとてもあると回答した者はそれぞれ 4.2%、4.5%で、こうした交流の機会が少ないことが分かった。これは、それぞれの寮の特色を反映しているものと考えられるが、小石川寮や国際学生宿舎でも、行事やパーティーを行う機会がもう少しあったほうがいいという自由記述も見られることから、寮内で希望者を募って交流する機会を持つこともよいのではないかと考えられる。

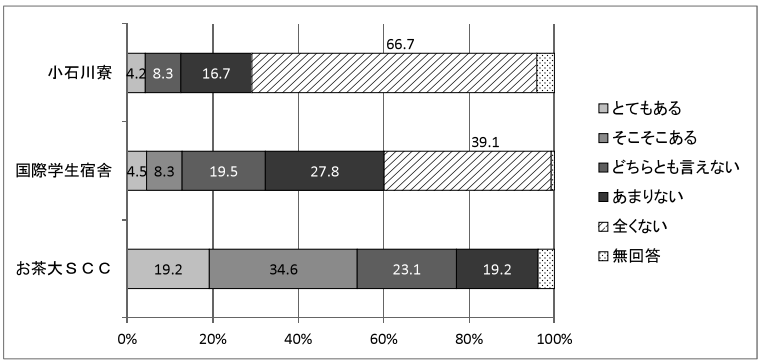
図表 1 - 32 世間話などをする



図表 1 - 33 補食室（ハウス）などの共有スペースで一緒に過ごす



図表 1 - 34 寮の行事やパーティーなどを一緒に楽しむ



まとめと今後の課題

本調査では、三つの学生寮の寮生を対象に、生活実態や満足度を調査して、比較検討することを目的とした。その結果、主に以下のことが示された。

まず、入寮前の寮に関する情報は、諸経費、施設や設備などについては、どの寮でも比較的多く情報があったが、管理システムや寮の規則については情報が少なかったことが示された。このことから、今後、不足している情報を、印刷物やホームページ等で分かりやすく明示していくことが必要と考えられる。

また、寮の施設・設備の満足度は、お茶大 SCC では全般的に高く、国際学生宿舎や小石川寮では全般的に低い傾向が示された。また、国際学生宿舎や小石川寮では、設備の問題にあわせて、使い方の問題も指摘されていることから、使用マナー等も呼びかけていく必要があると考えられる。

さらに、寮の規則・寮費等の情報は、多くの寮生が認知しているものの、特に小石川寮では、寮の規則に対する不満や、設備・備品の使用に関する不満が多いことが示された。このことから、寮生のニーズも踏まえつつ、規則を明示していく必要があると言える。

また、寮の運営機関、非常時の対応等の情報は、全般的にあまり認知されておらず、各寮で周知させていく必要があることが示唆された。最後に、寮内の対人関係は、お茶大 SCC では様々な交流が行われている一方、国際学生宿舎や小石川寮では、交流の機会が少ないことが示された。これは、各寮のコンセプトを反映していると考えられるものの、国際学生宿舎や小石川寮でも希望者を募り、交流する機会を設け、今後は、三つの寮の交流を促していくことが課題と考えられる。

（5）海外の大学の学生寮視察調査

1）アメリカの学生寮

はじめに

アメリカの大学の学生寮では、学生寮を寝食の場としてとらえるだけでなく、学生寮だからこそ実現できる教育的機能を重視して、様々な形態や機能を発展させてきた。そこでの取り組みは、日本の学生寮の参考になる部分も多く、とりわけ、学生寮の個室化が進む今日では、学生寮での寮生同士、寮生と教員との関わりがもつ意義は大きい。そこで、本調査論文では、アメリカの大学の学生寮を視察した結果をまとめ、交流を通しての学びの場としての機能を明らかにし、お茶の水女子大学の学生寮、とりわけ、新寮「お茶大 SCC」での取り組みの参考とする知見を得ることを目的とする。

本視察調査は 2011 年 2 月に行われ、昭和女子大学ボストン校、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、ボストン大学の四つの学生寮を視察した。そこで、大学ごとにその現状と特徴及び、寮での交流や活動について概観する。

【昭和女子大学ボストン校】

・寮の概要

昭和女子大学ボストン校（昭和ボストン）及び学生寮は、1988 年に設立され、現在、40 人が入居可能な寮棟が 10 棟、大学キャンパスに併設して運営されている。この寮は、主に日本人留学生（ほとんどが昭和女子大学生）を受け入れており、留学生がアメリカで生活し、アメリカの文化に触れる機会を提供することを目的として運営されている。日本人留学生は、主に学部 1、2 年生で、5 ヶ月から 1 年 6 ヶ月の留学プログラムで訪れる。各寮室は、二人一部屋を基本とし（一部四人部屋もある）、食事も提供される。また、寮は大学の図書室や教室につながっている他、寮全体での共有施設として、フィットネス・ルーム、ゲーム・ルーム、屋内プール、ヘルスルームなどがある。また、各寮棟での共有施設として、共有ラウンジ、トイレ・バスルーム、ランドリー・ルーム、キッチンなどがある（図 1）。

図 1：昭和女子大学ボストン校の学生寮

・寮での交流や活動

寮の運営は、8 名の大学のスタッフが担当している他、レジデント・アシスタント(RA)が、各棟に 2 名ずつ住み込みで滞在している。RA は、ボストン在住の大学院生や社会人などで、昼間は通学・通勤をしながら、スタッフが不在となる夜や週末に、ボストンの生活や情報、イベントなどを企画して、昭和ボストンの日本人留学生のための日常的なサポートを行っている。また、RA は、ニューイヤー・イブ・パーティー、ハロウィン・パーティーなどのアメリカの伝統的なイベントを企画したり、ボストン市内の観光名所等に日本人留学生を連れ出して、案内したりする。

寮生同士の交流や活動としては、日本人留学生が滞在中に、棟の全員で参加する企画（寮祭等）をして、棟全体での共同作業の機会を作っている。この活動によって、連帯感や達成感を学び、その後の留学生活が、より活性化すると述べられていた。その他にも、ボランティア活動も盛んで、地域との連携のもと、老人ホームや小学校で日本文化を紹介する交流も行われている。また、各棟には、日本人留学生のリーダーと副リーダーが 2 名いて、様々なイベントや共同作業を通じて、リーダーシップを育てていくことも重要であると述べられていた。また、寮内で何か問題が発生した場合は、寮生同士で話し合って解決させることを基本としており、それによって、仲間意識や問題解決の方法を学ばせていくと述べられていた。

【ハーバード大学】

・寮の概要

学部学生は全寮制であり、ほとんどがハーバードヤードと呼ばれる学内の寮(On-Campus Housing)に住んでいる。

寮は各自希望で選択することが出来、人気がある寮は抽選となる。寮は一人部屋から四人部屋（ルームメイトとの相部屋）などの様々なタイプがあり、食事付き・食事なしなどの条件も選択できる。寮費は部屋によって異なるが、1 学期で約 40～55 万円程度のものが中心である。全ての学生寮は大学の生活支援課(Harvard Real Estate Service)が管理運営している（図 2)。

図 2：ハーバード大学の学生寮

・寮での交流や活動

ハーバード大学では、学内で様々なイベントが催されており、多くの寮は学内にあるため、取り立てて寮に限定したイベント等は行われていない。ただし、学内の寮では、寮生が個人個人で主体的にイベントを企画したり、参加したりすることがあり、寮にもよるが、寮内での交流は概ね行われている。また、上級生と下級生の交流も特別に企画されてはいないものの、寮生が集まる食堂で、授業の課題について教え合ったり、就職や進学の相談をしたり等、日常的に関わりをもち、助け合っている。また、ハウス制を採用している寮では、共同生活上で問題が生じることもあるが、ほとんどの場合は当事者同士がよく話し合って、問題を解決していると述べられていた。

大学からの特別な働きかけがなくても、このような交流が自発的に行われる理由として、一つには、学生が自立を目指し、寮でも主体的に生活する姿勢をもっていることが挙げられる。自宅からの通学距離の関係もあるが、アメリカでは、大学生になると親元から離れて寮で生活することが一般的である。そのため、学生も寮生活を通じて、自立していく意欲をもっており、寮内で、何か問題が起こった場合には、自分たちの責任として捉え、できるだけ当事者同士が話し合って、問題解決するという意識を持っていると述べられていた。

【マサチューセッツ工科大学】

・寮の概要

学部学生用に 12 の寮棟があり、1918 年に建てられた古い寮から 2008 年に建てられた新しい寮まで、様々なタイプ・外観の寮が点在している。学部学生の 74%は、学内の寮に住んでいる。寮のタイプとしては、一人部屋から四人部屋などがあり、食事なし・食事付きなどの条件の選択もできる。寮費は様々だが、1 学期で 40～50 万円程度のものが中心である。寮内には、共有施設として、フィットネス・ルーム、ゲーム・ルーム、コンビニエンスストア、ミーティング・ルーム、学習・パソコンルーム、視聴覚ルームなどがある（図 3)。

また、大学院生の寮は、単身寮のほか、大学院生には既婚者も多くいる為、家族で住めるアパート形式の寮もあり、子どものプレイルームや遊戯施設も充実している。

全ての学生寮は大学の学生寮課(Housing Office)が管理運営している。

図 3 マサチューセッツ工科大学の学生寮

・ 寮での交流や活動

マサチューセッツ工科大学の学生寮では、全ての寮に共通して、「住居プログラム(Residential Life Programs)」が組まれている。これは、大学の関係者がチームを組み、連携して寮生をサポートするシステムである。プログラムの一番上層には教授が置かれ、各寮に一人の教授が家族とともに住み、寮生の学習面や心身面でのサポートを統括的に行う。その下層に GRT(Graduate Resident Tutors)が置かれ、これは大学院生 1 名が 35~40 名の学部生を担当し、相談相手となって、サポートを行うシステムである。さらに、RLA(Residential Life Associate)が置かれ、寮生の夜間の対応や教育的プログラムの企画（一例として、エンジニアを招待した講演パーティーや、僧侶を招いて、仏教についての講演や実演を行う等）などを行う。また、教育的プログラムだけでなく、各寮で寮生が主催するイベント、ゲーム、エクササイズなども豊富にある。教育的プログラムでも、寮生主催のイベントでも、重要なことは、企画のバラエティを多くして、寮生の興味や関心を広げ、将来の可能性を広げることであり、そのために、全てのスタッフが、寮生がどんなことに興味をもっているかを常に考え、様々な企画を工夫していると述べられていた。

また、入寮時には、段階的な細かいプロセスがある（図 4）。初めに、CPW(Campus Preview Weekend)が設けられており、新入生はこの期間の三日間、実際に寮で暮らし、どの寮に入寮したいかを検討する。CPW の期間は、各寮で様々なイベントが行われ、寮生はそれらに参加し、さらに、全ての寮が紹介された寮ガイドを見て、入寮を判断する。そして、入寮したい寮を決定した後、三日間のオリエンテーションが行われ、この期間に、希望した寮で生活してみて、本当にこの寮でいいかを再確認し、その後、入寮の最終決定となる。入寮が決まったら、寮生のリーダーと相談して、フロア、居室などを自分たちで決める。このように、入寮までに細かいプロセスがあるが、これは、寮ごとに独自の文化があり、どの寮が自分に合っているのかを時間をかけて考えさせることで、入寮後の問題や不満を減らし、寮生活を満足させるための工夫であると述べられていた。

さらに、寮内での寮生同士の関わりは、日常的に活発である。上述したイベントの企画等や、寮生同士のサポートも日常的に行われている。寮生同士が助け合い、異なる価値観や個性に触れながら、ともに成長していくことが寮生活の目的であると述べられていた。特に、上級生と下級生の関わりは重要と考えられ、どの寮でも、異なる学年や学部が混ざって生活しており、上級生は、下級生の学習、心身、生活態度など、大学生活全般のサポートをするよう、大学からも働きかけていると述べられていた。また、寮間でも交流の機会が設けられており、年に数回、寮のリーダーが集まってミーティングを開き、各寮のイベントや寮での取り組みを話し合って決めていく。

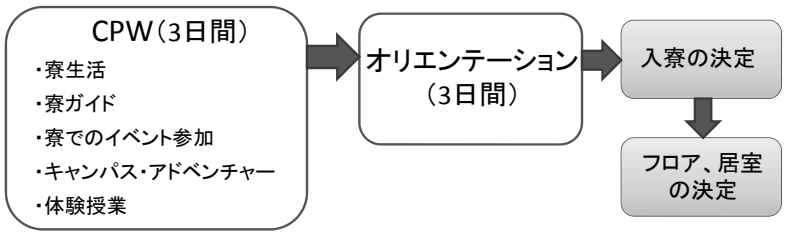


図 4：入寮までのプロセス

【ボストン大学】

・寮の概要

ボストン大学には、学部学生約 16,000 名、大学院生約 8,000 名が在籍しており、そのうち、学内の寮で学部生の約 11,500 名、大学院生の約 800 名が生活している。寮棟は、大小様々なものが 147 棟ある。寮は各自希望で選択することができ、一人部屋や四人～六人部屋など様々なタイプがあり、食事なし・食事付きなどの条件の選択もできる。寮費は様々だが、1 学期で 45～55 万円程度のものが中心である。共有施設として、ゲーム・ルーム、コンビニエンスストア、カフェテリア、ミーティング・ルーム、学習・パソコンルーム、視聴覚ルームなどがある（図 5）。また、学生の生活する地区(Student Village)には、学生が自由に使える大型のスポーツセンターも併設されており、温水プール、トレーニングジム、ロック・クライミング、屋内テニスコートなども完備されている。

図 5：ボストン大学の学生寮

・寮での交流や活動

寮の運営は、大学スタッフが各寮に配置されて行っている他、RA（レジデント・アシスタント）が各棟にいる。RA は上級生や大学院生などが担当しており、寮生の第一の接触先として、下級生の寮生のサポートを行っている。それでも解決できない問題があった場合は、ディレクターや学内の寮に住んでいる教授が対応することもある。ただし、ボストン大学では、キャンパス・ポリシーとして、学生の責任を重視しており、厳格な規律がある。寮の運営も、このキャンパス・ポリシーに則して行われているため、何か問題が発生した場合は、できるだけ自分たちの責任として、寮生自身で解決していくように促していると述べられていた。特に複数人で暮らすユニットタイプの寮では、対人関係の問題が生じやすいが、その場合も、学生自らが、寮生活で他人と共同で住む意味を考え、他者と関わりながら問題解決をするよう、教育していると述べられていた。

また、寮での交流として、毎月多数のイベントが行われており、学内にイベントを企画するための部署、SA(Student Activity)が設けられている。SA は学生と共同して企画を立て、学生の興味を引くイベントを製作している。一例として、スポーツイベント、文化交流のイ

ベントなどの他、外部の著名人を招いた弁論大会などの教育的なイベントも多く行っている。これらのイベントに学生を惹きつける工夫として、「寮生を惹きつけるような広告を行い、どんなパッケージにするかを工夫している。独創的なもの、時事と関連したものなどは、学生の関心を集めやすく、よく行われる。このように、寮生のモチベーションを高める仕掛けを常に考えている」と述べられていた。また、教育的なイベントは、単なる講義にせず、例えば、コミュニティサービスに結び付け、単位の取得や謝金などの対価を与えることで、自身の関心のあるコミュニティサービスが選択でき、対価が得られるなどの工夫をしていると述べていた。

日米の学生寮の比較及び、今後の課題

最後に、視察した四つの大学の学生寮に見られた特徴をまとめ、それを踏まえて、今後、本学の学生寮の運営において課題と考えられる点を挙げる。

1 点目として、アメリカの学生寮では、大学の教職員及び RA 等の専門スタッフが、寮の運営や取り組みに積極的に関わっていることが挙げられる。特に、マサチューセッツ工科大学、ボストン大学等では、教授が寮に住み込むことにより、教育面、生活面でのサポートを行うと同時に、寮生の責任感や自立を促す働きかけを続けていくなど、寮生活が人格形成にも重要な役割を担うものと考えられていることがうかがえた。このように、アメリカの学生寮は、「生活の場であると同時に教育の場」と考えられて運営されており、教育的機能を併せもっていることが示唆された。

本学に翻ってみると、これまで本学の学生寮には、職員等のスタッフは配置されていたが、教員と学生との関わりはほとんどもたれず、教員と連携した教育的活動もほとんどなかったといえる。このことを踏まえ、お茶大 SCC では、「学修プログラム」を行うことで、本学の教員が寮生と教育的関わりを持つ機会が設けられている。また、教員が学寮アドバイザーとして寮に関わることで、寮生の支援のニーズを把握しやすくなり、寮生の教育面、生活面でのサポートを拡充していくことができるのではないかと考えられる。ただし、お茶大 SCC 以外の二つの既存寮では、そうした取り組みは行われていないため、今後は、お茶大 SCC での取り組みを踏まえて、他の寮でも、それぞれの寮の機能に応じた支援プログラムを作り、寮生のニーズにあわせた支援や、教育的機能の向上を図っていくことが課題と考えられる。

さらに、2 点目として、アメリカの学生寮では、寮生同士の交流が重視されており、特に上級生が下級生のサポートをすることで、お互いが成長し合うことが目指されている点が挙げられる。下級生にとって、上級生は、寮の仲間でもあるため、上述した大学のスタッフより接触しやすく、サポートも受けやすいという利点がある。お茶大 SCC でも、こうした利点を生かす取り組みとして、ハウスには、1 年生と 2 年生を交ぜて入居させ、2 年生が 1 年生のサポートをしつつ、相互の交流の中で、お互いがともに成長し合うことを目指している。ただし、お茶大 SCC には学部 1、2 年生しかいないため、さらに上級生の学部 3、4 年生や大学院生との関わりをもつことが難しい。したがって、今後は、学部 3、4 年生の住む国際学生宿舎や、大学院生の住む小石川寮との連携を図り、寮生同士のより広いサポート体制の枠組みを構築していくことが課題と考えられる。

3 点目として、アメリカの学生寮では、寮生と教職員が連携してイベント等を企画・運営していることが挙げられる。また、イベントは娯楽的なものばかりではなく、弁論大会、異文化交流等の教育的なイベントや、スポーツ大会等、多様なものが実施されている。このように、多様なイベントを実施し、間口を広くすることで、寮生が自分の興味の持てるイベントに参加できるようにし、様々な活動を通して、生活を充実させると同時に、新たなチャレンジを通して、将来の選択肢を増やすことが可能となるものと考えられる。

本学では、これまでは、教職員と学生とが連携してイベントを企画することはなく、寮生が主体的に実施しているウェルカムパーティーなどのイベントを除いて、イベント自体もほとんど実施されていなかった。このことを踏まえ、お茶大 SCC では、学生支援プログラムを通じて、様々な種類のイベントを企画しており、学生が自主的に行うイベントだけでなく、教職員が主体となって企画するイベントも実施される予定である。ただし、これらのプログラムは、現時点では体系的に整備されているとはいえないため、今後は、プログラムの目的に応じて、イベントを体系立てて行っていくことが必要と考えられる。また、ボストン大学でのヒアリングでも述べられていたように、教育的なイベントは、硬い内容になりやすく、それでは寮生も参加したがらないため、寮生の興味を引く工夫が必要と考えられる。したがって、今後は本学でも、そのような仕掛けや広告方法なども改善し、寮生がモチベーションをもって企画、参加できるようなイベントにしていく必要があると考えられる。

以上をまとめると、本調査では、アメリカの大学の学生寮を視察した結果、教員と寮生との交流、寮生同士の交流が積極的に行われており、大学内での連携が図られていることがうかがわれた。また、このような連携の中で、多様なイベントが学内や寮内で頻繁に行われており、寮生活全般が、寮生にとっての学びの場として機能していることが示唆された。今日、日本の学生寮の個室化が進む中で、寮生同士の関わりが減少する可能性が指摘されているが、こうしたアメリカの学生寮の取り組みから、寮の機能を見直し、新たな可能性が提言された点に意義があると考えられる。

参考文献

赤坂瑠以（2010）「アメリカの大学の学生寮視察調査：本学の学生寮への提案」『高等教育と学生支援―お茶の水女子大学教育機構紀要―』1：49-55, 2010.

鈴木杏理・元岡展久・桂瑠以（2012）「女子大学学生寮における寮室と教養空間の構成『高等教育と学生支援―お茶の水女子大学教育機構紀要―』2：14-21, 2012.

2）アジアの学生寮

はじめに

近年、アジアの高等教育のグローバル化が進み、日本においてもグローバルに活躍できる人材の育成が求められている。お茶の水女子大学においても、2012 年度から「グローバル人材育成推進事業」が始まり、国際的に活躍する女性リーダーの育成に取り組んでいる。

今年 6 月に発表された、英国の大学評価機関クアクアレリ・シモンズ(QS)の「アジア大学ランキング」では、1 位は香港科技大学、2 位はシンガポール国立大学、3 位は香港大学であった。日本は 8 位の東京大学が最高位であった。上位 5 校のうち、3 校が香港の大学であることからも、香港がいかに優秀な学生を引き付けているかを窺うことができる。

本調査報告ではアジアの中でも特に評価の高い、シンガポールと香港の大学において、学生寮における取り組みをまとめ、寮生の入寮理由、寮内の交流及び寮内組織から、お茶大 SCC での取り組みの参考とする知見を得ることを目的とする。

本調査は 2013 年 9 月に行われ、シンガポールのシンガポール国立大学、南洋理工大学、中国・香港の香港大学の学生寮担当者による案内のもと行われた。

【シンガポール国立大学(National University of Singapore: NUS)】

シンガポールは東京 23 区程度の面積しかない無資源の国土に、378 万人の国民が住む都市国家である。1997 年にゴー・チョクトン首相（当時）が打ち出した“東洋のボストン(Boston of the East)”演説が有名であるが、10%ほどであった留学生入学率を 20%に引き上げ、同国をボストンのような世界の優秀人材が集う学術都市にするという国家ビジョンである。以後アジア各地で留学生セミナーを開催し、各国の学生や教員を短期研修でシンガポールに招待するなど、積極的に人材の招致に取り組んできた。この結果、2011 年には同国の大学入学者における留学生の比率は 18%を占め、教員は 50-70%が海外からの招聘者となっている（池田,2012）。

シンガポール国立大学は 1905 年創立のシンガポールで最も歴史のある大学で、学部・大学院合わせて 30,000 人以上の学生を有する総合大学である。大学内には六つの Hall（寮）のほかに、Residential College、Student Residence といった学部生、大学院生用の学生宿舎がある。また近年では University Town (U-Town)も建設されている。本視察調査では、学部生用の学生寮である Hall の内、「Temasek Hall」を訪問した。

・概要

Temasek Hall は Kent Ridge Campus に立地し、A から E の五つのブロックに、420 部屋 485 名が入居している。男女比はほぼ同じで、階によって男女の居住スペースが分かれている。学年別では、1 年生が 40%、2～4 年生は 20%という割合になっている。学生の出身地は、シンガポール 60%、留学生 40%という割合になっている。これはシンガポール政府及び大学の方針で、留学生の受け入れを進めるとともに、シンガポール出身学生にもグローバルな経験を積むことを推進していることから、大学の国際化目標である「6 : 4」に倣っている。

寮費は、一人部屋 100SGD/週、二人部屋 70SGD/週である。1 学期は 12~13 週のため、840~1,300SGD になる（SGD：シンガポールドル。2014 年 2 月のレートで 1SGD≒80 円）。5 月から 8 月の休暇中は、オリエンテーション等で寮内に残る学生を寮内の一つブロックに集め、空室を他の団体に貸し出している。寮内には大きな食堂があり、平日の朝食・夕食、土曜日の朝食、日曜の夕食が提供される。食費は寮費とは別に 1 日あたり 3.5SGD がかかる（図１）。

図１：シンガポール国立大学　Temasek Hall の外観及び設備
（左上より、外観、中庭、花壇、食堂、トレーニング・ジム）

・入寮手続きと入寮理由

入寮に関しては寮内の学生組織である JCRC(Junior Common Room Committee)が選考を行う。申込はインターネットで受付、スポーツの大会に出場経験がある、出身高校、家庭事情等により JCRC が SCRC(Senior Common Room Committee)に推薦する形で行われる。JCRC が推薦した入寮希望者は、ほぼ承認される。後程触れるが、NUS の六つの Hall は、寮対抗のスポーツ大会がたいへん盛んであるため、スポーツの経験が重視される傾向にある。またスポーツをはじめとした寮のプログラムをよく理解した上で、入寮を希望しているかどうかを判断し、ミスマッチを防ぐ役割もしている。

シンガポール出身の学生のほとんどは自宅からの通学が可能な距離に住んでいる。このようなこともあり、「なぜ学生寮に入寮するのか」という疑問をホールマネージャーに尋ねると、「リーダーシップ・スポーツマンシップの経験を積む」、「家族の勧め」、「異なる価値観と出会うため」という理由が挙げられた。シンガポールでは住宅事情から、男性女性ともに結婚まで家族と同居することが多い。男性は大学入学前に兵役に入ることが多く、家族からの独立を経験するが、女性にはその機会がない。そのような背景もあり、家族が大学入学を機に、親離れを促すように入寮を進めることもある。以前は祖父母や「お手伝いさん」が週末になると寮に来て、居室内の掃除をする光景も見られたという。現在は入寮まで洗濯をしたことのない学生も入寮するが、掃除・洗濯は各自で行っている。

・寮内の交流と寮内組織

寮内の行事は週末に行われることが多く、寮対抗(Inter Hall Games)、寮内ブロック対抗のスポーツ大会、入寮初日のイニシエーションの意味合いを持つ行事、五つのブロックごとに食事を囲む「ブロックテーマナイト」、「Rag Day」（廃材を利用して山車を作りパレードを行う NUS の行事）、演劇、バンドコンサートといった寮を挙げての多彩なイベントが行われている。スポーツはサッカー、バスケットボール、水泳、陸上と多岐にわたり、17 種目の勝敗によりポイントが加算され、順位が決まる（図２）。

後期の終わりには、寮生組織である JCRC の選挙が行われ、次年度の役員が決まる。JCRC の役職は President、Honorary General Secretary、Director(Social Affairs、Cultural、Sports、Finance、Operations、Special Products)があり、任期は 1 年間である。1 年以上在寮の 2～4 年生が立候補することができる。

SCRC は NUS の教員で構成され、1 名の Hall Master と 5 名の Resident Fellow が A～E のブロックをそれぞれ担当する。また 10 名の Hall Staff が事務的作業、警備、管理運営を行う。今回寮内を案内してくれた Hall Manager の男性は、マレーシア出身で NUS の学生のときに、この寮の Hall Master でもある教授の研究室に所属していたことが縁で、現在寮の仕事をしている。

JCRC と SCRC は新学期が始まる前に、一緒にチームビルディングの研修を受け、カウンセリングの講習も受けている。寮内で人間関係の問題が発生した場合は、まずは当該学生の仲の良い友人に声をかけるように促し、SCRC は友人を介して本人をサポートする方法をとっている。そのためにも、JCRC は寮内の人間関係にも目を配りながら、孤立する学生がいないように気を付けている。また朝・夕の食事は、全員で一緒に食べることが望ましいとされているため、食事に現れない学生は何か問題を抱えている可能性があるというというサインにもなる。

図 2：Temasek Hall 寮生組織及び寮内の交流の様子

（左上より、寮対抗スポーツ大会の表彰、SCRC 紹介、JCRC 紹介、各階のメンバー表）

【南洋理工大学（Nanyang Technological University :NTU)】

南洋理工大学は 1991 年に設置され、学生数は約 30,000 人が在籍している。学内には 16 の学部生用の学生寮があり、現在あと 2 寮を新規に建設している。学生寮の規模は国内最大で、学部生 20,000 人のうち、約 9,000 人分の部屋を確保している。NTU は 2010 年第 1 回ユースオリンピックの競技会場として使われたことから、学生寮は選手村としても使われた。本視察調査では、ハウジングオフィスの学生寮担当職員による案内のもと行われた。

・概要

南洋理工大学の学生寮は一つの寮につき 500 人又は 652 人の定員で、男女比は学年によって差はあるが全体ではほぼ同じである。シンガポール出身者と留学生の割合もほぼ同じである。寮費は一人部屋約 300SGD/月、二人部屋は約 200SGD/月で、寮によってバス・トイレ・エアコンといった設備に差があることから、寮費もそれに伴い増減する。寮で提供される食事はないが、寮内にはキャンティーン（食堂）、また大学構内にもレストラン、売店がある（図３）。

図 3：南洋理工大学の学生寮の様子（左上より、外観、食堂、談話室）

・入寮手続きと入寮理由

入寮に関しては、大学の学生課で一括して行われる。ポイントシステムをとっており、在寮期間は 1 年間で、次年度に在寮できるかどうかはポイントが高い人から決まる。ポイントを増やす方法はいくつかある。まず、寮のアクティビティ（行事）に参加する、寮内の委員会に所属する、留学生である、シンガポール出身でも大学から家が遠い、大学の部活に所属しているという場合は、ポイントが加算される。また二人部屋を希望する場合は、同部屋になる留学生とペアになり一緒に申込をすると、留学生支援をするという意味から優先される。ポイントは年度毎に計算され、ポイントの繰り越しはできない。満室になった場合は、Waiting List に掲載され、空室ができたらポイントが高い順に入寮が決まる。

入寮理由は、大学が中心地から 1 時間程離れていることもあり、通学時間のことを考えてという者が多い。また親からの独立、友人と一緒に暮らせるからという者もいる。一つのホ

ールあたり、約 600 名の寮生のうち、3 分の 1 は寮内での積極的な活動を希望しており、3 分の 2 は大学への通学時間の短縮のため入寮しているという話である。

・寮内の交流と寮内組織

寮内の交流は、スポーツ（バスケットボール・バレーボール・スカッシュ・ラグビー・水泳・水球・陸上・テニス・サッカー等）が盛んな他に、ダーツや各種ボードゲームの同好会もあり、いずれも寮対抗で競い合っている。スポーツの同好会は一人につき一つまで登録が可能である。また各寮では、新入生オリエンテーションキャンプ、「Dinner & Dance」（季節ごとのパーティー）、「Hall Production」（演劇大会）といった誰でも参加ができるイベントが多数企画されている（図４）。

寮生組織は JCRC が中心的な役割を担う。JCRC は各寮 20 名で構成され、1 年生から応募も可能であるが、そのようなケースは稀であるので、多くは 2 年生以上学生である。JCRC の役職は、President、Vice President、Business Manager、Financial Controller、Secretary (Sports、Social、Welfare、Cultural 等) がある。寮の卒業生の組織はなく、JCRC は年度ごとに記録を取り、それを後任に引き継いでいくようになっている。

また 5 名の大学教員が寮のフェローを務めている。任期は 3 年で、フェロー手当がつき、家族も一緒に住めること、構内には幼稚園もあることなどから、希望者は多い。問題が発生した場合は、日中は各寮にある事務室に、夜間はフェローに相談するようになっている。

図 4：南洋理工大学　寮内の交流の様子
（左より、Hall 12 の掲示板、Hall 13 の掲示板、寮内スポーツ大会の写真）

【香港大学（The University of Hong Kong：HKU)】

香港大学は 1911 年に設置された、香港で最も歴史のある大学である。学生数は学部約 12,000 人、大学院約 12,000 人、合計 24,000 人で、学部生用には 13 寮 6,500 人分の部屋を確保している。13 寮のうち、2 寮が大学構内にあり、11 寮はキャンパス周辺に立地している。

学生の出身地は、中国本土からが半分を占め、留学生はアメリカ、カナダ、イギリス、韓国、オーストラリアと他のアジアの国々からの者も多い。1 学期には 1,500 人の新入寮生、2 学期には 300～400 人が短期留学で宿泊するため、寮生の入退寮は年間を通して流動的である。

本視察調査では、大学内の学生生活支援、キャリア支援の部署である、Centre of Development and Resources for Students (CEDERS)の学生寮担当者の案内のもと、構内に立地する「Simon K.Y. Lee Hall」を訪問した。

・概要

Simon K.Y. Lee Hall は 1985 年開寮し、学部生約 300 人が入居している。地上 10 階、地下 3 階、1-8 階が住居部分、9 階はランドリーと Warden（管理者）の住居、地下には寮内の活動で使用するスペースもある。各階に 20 部屋 40 人住むことが可能で、階によって男女が分かれている。新入生は 2 人部屋に入る。各階に 1、2 名のチューターの学生おり、大学院生が務めることが多い（図５）。

寮費は年間 11,844HKD（HKD：香港ドル。2014 年 2 月のレートで 1HKD≒13 円）で、食費は別である。6 月上旬から 8 月上旬の夏季休暇中に宿泊を希望する場合は、宿泊日数に応じて別に寮費を支払う。

図５：香港大学 Simon K.Y. Lee Hall　外観及び寮内の様子
（左より、外観、各階の談話室、寮行事のタペストリー、エレベーター内の寮生活動の広告、寮生のメールボックス）

・入寮手続きと入寮理由

入寮は CEDARS が管理し、5 月からオンラインで受付をする。申込の際は、基本的な情報の他に、希望の寮を三つ、健康状態、興味関心、趣味等を記入する。香港出身の学生については、通学時間と家庭の事情をポイント制にして、ポイントが高い者から入寮が決まる。

香港はシンガポール同様の住宅事情を抱えており、一般の住居は家賃が高いため学生が借りることは難しい。そのため大学近辺の空き物件を大学が買い取り、「Non-Hall Housing」として学生に住居を提供している。費用は寮費とほぼ同額で、寮生組織はないため、それらにかかる費用は含まれない。

・寮内の交流と寮生組織

シンガポールの学生寮と同様に、寮対抗のスポーツ大会は盛んである。入口の共有スペースや、寮内のエレベーターには各スポーツチームからのインフォメーションや、試合の結果が掲示されている。新入生を迎えるためのイベントやホームページも充実しており、三泊四日のオリエンテーションキャンプ、「Reg Day（Registration Day）」、寮内スポーツチームの勧誘、寮行事の紹介が行われる（図６）。

寮生組織は各寮にあり、Simon K. Y. Lee Hall では、LHSA (The Simon K. Y. Lee Hall Students' Association) と呼ばれる。役職は、Chairperson、Internal Vice-Chairperson、External Vice-Chairperson、General Secretary(General、Financial、Acting Welfare、Social Secretary、Sports 等)があり、寮生内の選挙によって決められる。寮の運営は大学の教員が務める学生監(Dean of student Affairs)のもと行われ、寮管理人、ホールマネージャー及びチューターが支える。

図.6：香港大学　Simon K.Y. Lee Hall　寮入口の掲示
（左より、新入生オリエンテーションキャンプ案内、寮対抗水泳大会の告知、寮対抗試合の結果）

シンガポール・香港の学生寮と日本の学生寮を比較して

三つの大学の学生寮の視察から学生寮の運営の特徴を挙げ、本学の学生寮運営における課題について考察する。

まず、入寮理由については、大学に近いという利便性を考えての理由もあるが、家族からの独立を経験する機会と捉えていることが挙げられる。これはシンガポールと香港と日本は住宅事情も共通しており、大学通学圏内に自宅がある場合は、就職、結婚まで独立の機会がない場合もある。地方出身の SCC の寮生は入寮した理由を、「一人暮らしの経験はいつでもできるが、寮生活は大学の時のみである」と語っているが、大学通学圏内の学生にも浸透していくことはなかなか難しい。近年日本において、大学生の親への依存傾向が増していることが問題と取り上げられることも多いが、学生寮経験が自律を学ぶよい機会となるのではないかと考えられる。

次に、寮内の交流については、寮生組織を中心に進められている。役職は選挙で決まり、役職に就くことは名誉とされる。学生たちは、多岐にわたる寮対抗のスポーツ大会、演劇、ダンス、パーティーといった寮独自の行事に参加することで、帰属意識を高めている。日本の大学生がいわゆる「(インカレ) サークル」に参加するのに対して、シンガポール・香港では寮のスポーツチームや寮でのイベントに参加することで、学生同士の交流が生まれている。

寮内の交流が活発になる仕掛けとして、大学側も寮の活動に積極的な学生かどうかを判断し、入寮者を決めている。NUS の Temasek Hall は学生が入寮選考を行い、自分たちの寮の活動に合った寮生を入寮させている。NTU は大学の学生寮担当部署が、入寮・在寮の継続についてポイント制にして、その中に寮の活動に積極的かどうかということでポイントの加算がされている。また NUS の中には、大学の成績が一定基準から下がったら在寮ができないという場合もあり、寮ごとに独自の基準をもつ。SCC では現在、寮の活動に積極的かどうかという基準では入寮を決めていない。事前に学生支援プログラムについてよく理解しているこ

とを望んではいるが、入寮前に実際に寮内での活動の様子を見る機会は、非常に少ない。入寮希望者への情報発信として、ウェブサイトの更新、オープンキャンパス等の行事での学生寮の紹介といった広報部門を強化することで、寮の理念を理解し入寮することが期待される。

SCC の特徴の一つは、「ルームシェア型」のハウス制をとっていることにある。NTU の学生寮担当者は、シンガポールではルームシェアのように少人数でキッチンやトイレを共有する場合、清潔な状態を保つのは難しいので、学生寮では難しいと話していた。今回の視察でも公共スペースの清掃は、専門のスタッフが行っていた。日本では学校教育の中で「掃除」の時間を設けていることが多く、公共スペースを掃除することの違和感がなく、学生寮においても当番制で掃除をすることに抵抗が少ない。実際に留学生との混住型の日本の学生寮では、留学生がキッチンやトイレの掃除を自分でしたことがなく、留学生に対して掃除をすることへの意識の変化を求めることがあるという。このことからもハウス内の公共スペースの清掃を寮生が行うというのは、日本の学生寮の特徴の一つであると再認識することができる。

おわりに

シンガポール・香港・日本と学生寮の規模は異なるが、寮内の交流を活発にするしくみについては参考にできる部分も多い。SCC は定員が 50 名、学部 1、2 年生を対象にしていることから、小規模であるからこそ全員にリーダーとなるチャンスがあり、一人一人が果たす役割は大きい。また海外への視察を通して、日本の学生寮もまた独自の発展をしてきたことがわかる。

SCC は開寮 3 年目であるため、現在はまだ寮の礎を築いている途中でもある。寮の将来に向けて、寮生組織や寮内の行事がよりよく発展するよう意見を出し合うことは、この時期だからこそできる経験であるということを、寮生ともに共有していきたいと考えている。

参考文献

池田充裕, 「第 4 章　シンガポール―世界の頂点を目指す自治大学化と米中を結ぶ新大学の誕生―」, 北村友人・杉村美紀共著, 激動するアジア大学改革－グローバル人材を育成するために, 上智大学出版, 2012, p65-81